

# ARIA The Visions

ゆう木

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『ARIA The』シリーズのオリジナル短編複数。オリキャラが登場したり、内輪の者同士が絡んだり、物語のバリエーションは色々です。

作者注：主要猫たちは物語に関わる場合を除いて、心苦しくも極力描写を省いております。悪しからず。

## 目次

### オリキャラ編

【1】 その、若い志は…… | 1

### 灯里編

【2】 ある波乗りと（前編） | 22

【3】 ある波乗りと（後編） | 37

【4】 恋をしたら【New!!】 | 53

### アリス編

【5】 その、雨上がりの夕焼けは…… | 58

## オリキャラ編

【1】その、若い志は……

\*  
\*

「宇宙って案外退屈な景色なんだなあ」

兄のアヤトがすぐそばの窓より外を眺めて言った。弟のアユムは、「そうだね」、と答えた。

「マン・ホームのテレビで見てた時はワクワクしたものだけど、実際の宇宙はただ真っ暗なだけで、のっぺりしてるんだね」

二人は声を潜めて話したが、それは彼らのいる場所が宇宙船の静かで暗い客室内だからだ。乗客の中にはぐっすり眠っている者や、これから眠ろうとしている者がおり、静寂が求められるので大きな音は立てられない。しかし小声でささやく程度であれば、別段問題はなかった。近くの乗客は、少々の話し声には気を留めず安らかに寝息を立てている。

彼らが乗っている宇宙船は、太陽系航宙社の運行するもので、マン・ホームとアクアの間を定期的に往復している。マン・ホームは人類の母星の地球であり、アクアはおよそ一世紀半前にテラ・フォーミングで開拓された、いわば第二の地球と言うべき惑星だった。かつては広大な砂漠が広がり、その中に大きな氷の塊があるだけの不毛な星だったが、今は水量の豊かな生命の星となっている。

二人の乗る宇宙船はマン・ホームを出発し、アクアに向かっていく途中であった。

「アクアってどんな星なんだろうな？ マン・ホームに似てるってことはよく聞くけど」

「ガイドブックによると、アクアはまだ発展途上だから自然が手付かずのまま残ってるんだって」

「要は景色が綺麗、ってことか？」

「実際はどうだろうね。ガイドブックの写真はすごく綺麗に見えたけ

ど」

「そりゃ、当たり前だろ。宣材の写真なんだし」

ふと、アクアまで後どれくらいの距離があるのか気になったアユムは、目の前の座席の裏側にあるディスプレイを指でタッチし、現在の航空状況を表示させた。

「後、五千万キロメートルだって。凄い距離だね」

画面の中の宇宙では、手前にマン・ホームが、奥にアクアがあり、宇宙船はその間に引かれた点線の上を、スイーツと繰り返し辿っている。

「五千万キロねえ。言われたところで、ケタが大きすぎてどれだけ凄いのか実感出来ねえな。気が遠くなるほどの距離だってことは分かるが」

「時間で言うと、宇宙船の時速が一千万キロだから、後五時間くらいだね」

「長いなあ」とアヤトは言っつて、大きくあくびした。

そして、彼は眠るべく腰に掛けた毛布を取って、肩より下まで覆い、目を瞑った。

すると、隣で弟が何か手に取ったことが、音で分かった。彼は弟が何をしているのか気になり、薄目を開けて見てみた。

アユムは、鎖付きの小さな懐中時計をまるで慈しむように、うつとりと眺めていた。その時計は色がすっかり褪せて、時針が永遠に止まったままのジャンク品だった。

「おい、アユム」と兄は目をパツチリと開ける。「その時計、家に置いてこなかったのか？」

アユムはみずから蔑むように苦笑いした。

「この時計のために、アクアへ行くんだからね。絶対に欠かせないよ」  
「やれやれ、熱心なことだねえ。そんな朽ち果てたもんにも、お前にとってはやっぱり情があるんだな」

「うん。これは宝箱同然だもん。確かに、今回の旅は僕の突飛な思い付きだと思うよ。時計屋で修行するためなんかには、わざわざ宇宙を渡るなんて。だけど、僕の生きがいはこの古い時計にしかないって、確

信をしちやったからね」

「そつか」とアヤトは短く、微笑んで答えた。「自分の希望を裏切れないんじゃ、仕方ねえな」

彼の言葉の後、アユムは懐中時計をしまい、兄と同じように毛布を取って身体に掛けた。

二人は揃って目を開けたまま、物思いに耽った。

「しかし、何年前だったっけ？」とアヤト。「お前が初めて古時計を見て、それに憧れを抱いた日って」

「十年前だよ。僕はまだしつかり覚えてる。小学校の社会見学で行った古い洋館で、見たんだ」

アユムは、昔語りを始めた。

「その洋館は、十九世紀末の動乱の時代の建物らしくて、凄く古かったんだけど、オシャレだった。塔みたいなのがあつて、出窓が付いてて、石で出来てて。洋風のお庭が付いてもいてね」

彼はその洋館に着いて、しばらくの間は、担任の教師と一緒に行動していたようだったが、ある時その教師が、社会見学の課題のために生徒達を自由にしたらしい。

「僕は特に歴史的建造物なんてものには興味がなかったから、時間潰しのためだけにあちこちの部屋を見て回ってたんだけど、ある小さな書齋みたいな部屋に入ると、ゴーン、っていう音がしたんだ。鐘というよりは、シンバルに近い種類の音だったね。結構大きかったからびっくりしたよ。調べてみるとその音は、一台の柱のように大きな時計からするんだね」

「それが、例の古時計だったというわけか」

「うん。僕は見慣れないその時計の様に夢中になって見入ったね。軽くて薄いデジタル時計しか知らない僕には、それは、フォームとか、ギミックとかが、凄く珍しかった。新種の生物を見つけたりしたら、きっとこんな気分になるんだろうなあと思ったね。金属の板状の振り子が催眠術をかけるように振れたり、その奥にある歯車が互いに噛み合って回っている姿は、僕の関心を異常にそそった。何でかは分からないけど、一つ一つの仕掛けがどんなに小さくても他と連動して動

いてるのが、無性に格好良く思えたんだ」

「それからお前は父さんと母さんをよく困らせたもんだよな」とアヤトは、呆れるように言った。「どこにも売られてない古時計を誕生日やクリスマスマスの日にせがんで」

「本当に、どこにも売られてなかったんだよね」とアユムは答えた。「悲しかったな。子供心に欲しいものが手に入らないことほど苦痛なことはないよ」

「さっきの時計が手に入ったじゃねえか」

「それはそうだけど、これは、ある古い時計屋のお爺さんがたまたま捨て忘れてたもので、売り物じゃなかった。それに、ボロボロだし——でも、こんなものでも、僕には嬉しかったな」

「あの爺さんに出会えたのは、確かにお前にとってラッキーだった。爺さんが、古い時計の大半が、設計図ごとアクアに移されて再利用されてることを教えてくれたんだもん」

「本当に、幸運だったよ。お爺さんと出会う前までは、まさか自分がアクアに行くなんて思いも寄らなかった」

「親切に弟子入りさせてくれる時計屋、すぐに見つかるといいな」「うん」

アユムが頷いた後、兄弟は静かになった。和やかな思い出話は、二人が眠るのにいい効果をもたらしたらしかった。

彼らを含め、多くの乗客が寝ている宇宙船は、無重力の中を突っ切って、彼方の水の惑星に超高速で向かった。

およそ五時間の後、宇宙船はアクアの外気圏まで進み、大気圏に入した。寝ていた乗客は起きて、宇宙より地上までの景色の移ろいをじっくり眺めた。宇宙の黒から空の青への移ろいは乗客の目を例外なく楽しませた。

大気圏を突破した宇宙船は、たくさんの島々が集合して出来た水路の街“ネオ・ヴェネツィア”の、マルコ・ポーロ国際宇宙港に降りた。アヤトとアユムの兄弟は宇宙港を後にすると、サン・マルコ広場という名の大広場に行き、そこでこの街の空気に含まれている濃い味のある異国情緒を味わった。

「マン・ホームに似てるっていう話は、どうやら本当のようだな」とアヤトは言った。「別の星で、宇宙に浮かんでいる位置は違えど、空気は同じ味だし」

「だけど、雰囲気はまるで違うね」

「そうだな。何と云うのか、過去に遡った気がする」

「ガイドブックによると、このサン・マルコ広場は、ナポレオンが賛嘆した場所らしいよ」

「ナポレオンか。ずいぶん昔の偉人が褒めた場所なら、そりや過去に遡った気がするのも当然だな」

「兄さん、これからどうする？　しばらく観光して回るか、ホテルにチェックインしに行くか」

「スーツケースを引いての観光は不便だろう？　早くホテルに行こうぜ。どんな部屋なのか楽しみだしな」

アユムは頷くと、アヤトと共に宇宙港の近くにあるホテルに向かった。

そこは、シユロの木が門のそばに植えられて南国の風情を醸し出している、背の高い、それなりに高級なホテルだった。

彼らはそして受付で手続きを軽く済ますと、照明やら壁の絵の額縁やらがやたらにゴージャスなツインの部屋に入った。

そこには当然のごとく時計があつたが、それがマン・ホームの博物館で見たのとそっくりの置時計だったので、アユムは感激した。彼はその時計をくまなく調べだし、アヤトは呆れた顔で、その様子を見ていた。

「凄いやこの時計。洋館で見たのと同じ造りなのに、ずっと新しい」「爺さんの言ってた、古い時計がアクアに移されてるっていう話は、その通りなんだな」

アユムは時計に抱きついて、「アクアに来たって実感がするなあ」と感嘆した。

アヤトは冷ややかな眼差しで、「ようやくかよ。やっぱアユムってマニアックなんだな」と言った。

やがてアユムのお熱が冷めると、彼らは早々に部屋を出た。宇宙船



で蓄積した疲れがあったが、二人は明日別れるため、少しの時間が惜しかった。

彼ら二人はネオ・ヴェネツィアに着いたその日、目一杯一緒に楽しい時間を過ごしたのであった。

◇

兄弟水入らずの和やかな夜が明けて訪れた朝は、青空が冴え渡り、微風が吹いて、すこぶる穏やかだった。

ホテルのガラスの入口より並んで出てきた二人は、うやうやしく頭を下げるスタッフに別れの挨拶をかけて、シユロの木のそばに来た。

「俺との同行はここまでだ」とアヤト。「これから俺たちは別々の方へ旅立つ」

「心細くなるね」とアユムは、言って不安のにじむ顔で笑った。

「馬鹿。そんな風な顔したって俺は甘やかさないぜ。俺は別の島へ、お前は時計屋へ、それぞれ一人で行くんだ」

そう言ってアヤトは腕時計を見、「そろそろ行く時間だな」と言った。「水上バスの出発時刻が近い」

アヤトは目線を上げてアユムを見つめると、「大丈夫だな？」と念を押すように尋ねた。「前にも言ったが、働かせて欲しいと頼む時は、とにかく低姿勢で行くんぞ。頭だけじゃなく、腰も低くしろよ。それが第一に大切なこと。それで第二は……」

アユムは兄のお節介に微笑し、「大丈夫だよ、兄さん」と言った。「一人で心細くても、僕はやっていける。お金を持ってないわけじゃないし、それに、僕はもういい年なんだから」

十六歳のアユムの自負を聞いた後、アヤトは、彼の方に手を伸ばし、その頭を撫でてやった。撫でられている間、アユムは照れ臭い気持ちだった。

「そんなら、兄さんも安心だ。次に会うのはいつか分からねえが、その時は、仕事の話をたっぷり聞かせてくれよ?」

「勿論、ちゃんと話すよ」

アヤトは弟の頭から手を離すと、「じゃあな」と言って、振り返って歩いていった。

「いい旅してきてね。兄さん」とアユムは兄の背中に声を掛けた。

アヤトは「おうよ」と答えて、アユムの方に東の間振り返ると、「お前こそ、グッドラックだぜ」と笑顔で言った。

そしてアヤトは遠くまで行き、アユムの目に見えなくなった。

アユムは内心で兄の背中を追いたい気分だった。それは甘えだともみずから戒めて我慢したが、彼は、やはり心細かった。これから彼は一人で、自律して行動しなければならなくなったわけだが、その行動の目的である予定が彼に圧迫感を与えていた。

アユムは今日、自分が時計造りをして働いていける時計屋を探し求める旅をするのだ。それが見つからなければ、知り合いのツテもろくな滞在費もない彼は、マン・ホームにとんぼ帰りすることになる。

意志は確かにあるものの、成功出来るか、彼は不安だった。

遠くの海原に、船の走る姿が見える。恐らくあれには、アヤトが乗り込んでいるのだろう。アユムはその船に視線を注ぎ、兄の応援を思い出し、おのれに喝を入れた。ポケットより例の懐中時計を取り出して見つめ、成り行きがどうなるのか分からないが、とにかく最後までやってやろうと、それに向かって意気込んだ。

◇

アユムがまず最初に難儀したのは、複雑な道だった。

ネオ・ヴェネツィアは複数の島が橋に繋がれたことにより出来た街のため、乱れた蜘蛛の網のごとく道が入り組んでいる。

アユムは地図を持ってはいるものの、上手く道順がたどれず、あっちへ行きこっちへ行きを繰り返した。

しばらくさまよっていると、彼は「もしもし?」、と誰かに話しかけられた。

挙動不審だったので、迷っていることを察知されたのだろう。彼はおずおずとその方へ向いた。

話しかけたのは女の子だった。

彼女は屈託のない笑顔をしており、青いラインの入った純白の、セーラー服のような衣装を来て、桃色の髪の上に同じ特徴の帽子を乗せている。そしてその髪は、耳のすぐそばで金色の輪に束ねられて、

腰の辺りまで真っ直ぐ伸びている。

朗らかで人懐っこいその雰囲気、アユムは胸がときめくような感覚がした。

「どこかお探しですか？」

「え、ええ。時計屋を探してるんですけど」

「時計屋ですか!」、と少女は驚いたように言った。「わたしも、時計屋さんにも用があるんですよ」

「本当ですか? 偶然ですね」

呆然として、アユムは少女の手のある物に気付く。それに対して彼は強い見覚えがあり、同時にまた、親しみもあった。彼はそれを指差し、「懐中時計ですね」と言った。

少女は、「はひ」と答え、鎖付きのそれを胸の高さに持ち上げ、アユムによく見えるようにした。「昨日突然壊れちゃって。動かなくなっちゃったんです」

彼女の持つ懐中時計は、自分で買ったのではなく、知り合いからの貰い物らしかった。それは、壊れて使い物にならないものであるという点ではアユムのものと同じだったが、その様相はてんで異なっていた。彼女の方はシルバーのボディが日光をよく反射しすこぶる高級感があつて綺麗なのに、アユムの方は錆が多く付いていて、汚くくすんでいた。

「僕も同じの持つてるんです」とアユムは言いたかったが、自分の時計が余りにもみすぼらしいので、断念した。

彼はしかし、生き生きとした光彩を放っている少女の懐中時計を見て、嬉しくなった。彼にとつて綺麗な古時計を見るのは、未だ新鮮な感慨をもたらしてくれることだった。

「その時計って、珍しいものなんですか?」

アユムは尋ねた。少女は首を振り、「時計屋さんで普通に売ってます」と答えた。

それを聞いたアユムは、マン・ホームの時計屋のお爺さんから聞いた通り、アクアでは古い時計が広く使われていることを知って、胸が暖かくなった。マン・ホームでは自分を除いて誰も関心を持たないど

ころか過去に忘却してしまったものを、ここでは大勢の人々が使っているのだ。

アユムは思わず「見せてくださいませんか?」、と少女に申し出てしまった。

「はひ、それは構いませんけど、壊れてるので動かないですよ?」「いいんです。見るだけで、僕には十分楽しいですから」

少女は懐中時計を渡し、物好きなアユムをきよとんとした顔で眺めていた。アクアに住む者にとっては特に珍しくもない代物を異常に珍しがるその様は、滑稽とまでは行かなくとも、おかしく思われた。

ボディーを一通り見終えたアユムは、懐中時計のカバーをパカツと開けて感嘆した。

「時計、お好きなんですネ」、と少女。

「ええ、そのために僕は、マン・ホームから来たんです」

「えっ、そうだったんですか?」、と少女は、アユムの出身地を知って驚いた。「スーツケースをお持ちなので、旅行に来た方だと思っはいたんですけど」

「変わってますよね」、とアユムは自虐的に呟いて時計のカバーを閉じると、少女に返した。「たかが時計のためなんか、旅に出るなんて」アユムの苦笑を見た少女は、何かわけがありそうだと見て取り、彼に興味を持った。

彼女は、アユムに時計屋に用のあることを今一度確認すると、一緒に行かないかと誘った。アユムは遠慮がちに迷惑でないかどうか尋ねたが、少女は微笑して、「ご案内します」と、いかにもガイドに慣れたような調子で言った。それに頼もしさを感じたアユムは、「助かります」とお礼を述べた。実際、道に迷っていた彼には、少女の案内は渡りに船の提案だった。

「僕はアユムって言います。お姉さんは?」

「灯里……水無灯里です」

二人は互いに名乗り合うと、時計屋を目指し並んで歩きだした。

◇

ネオ・ヴェネツィアの街中を彼らは、自分の紹介をしながら進んで

いた。

アユムは、古い時計に興味を持った経緯や、アヤトという兄がいることを教え、灯里は、マン・ホームで生まれ育ち、東京よりアクアまで来たことを教えた。

アユムは灯里が自分と同郷であることにもそうしたが、それよりも、彼女の言った恐らく職業であろう言葉の方に、より強い興味を持った。

「ウンディーネ、というのを、灯里さんはしてるんですか？」

「はひ。ゴンドラを漕いで、ネオ・ヴェネツィアに来る方々の観光をお手伝いするんです。まだ半人前ですけどね」

彼は、ウンディーネが水の妖精という意味の言葉であり、また、一流の操船術ゆえに実際に妖精と称される三人のウンディーネがネオ・ヴェネツィアに存在することを、水先案内業界における主な三社の名前と共に知った。

「その妖精の一人が、アリシアさんなんです」と灯里。「わたしの務めるARRIAカンパニーのトップで、先輩です。トップとは言っても、従業員はたった二人だけなんですけどね。つまり、わたしはトップの二番目です」

言った後、灯里は冗談めかして誇りに思うように「エへへ」とはにかんだ。その苦笑が、どことなく愛らしくて、アユムは同じく苦笑で応えるのに苦労した。彼は、灯里が笑顔になる度に、何か特別な感情が芽を出すような気がして、胸苦しかった。

灯里の自己紹介はしばらく続いたが、やがて区切りを迎え、自然と話題がアユムの旅の理由に移行する。

「アユムさんは、どうしてアクアへ来られたんですか？」

「僕は」、と彼は、やや重々しい口調で言いだした。「修行しに来たんです。時計屋にね」

「修行？」

アユムは頷くと、不格好だと億劫がりながらも、ポケットからポロポロの懐中時計を取り出して、灯里に見せた。

「わあ、凄い年代物ですね」と彼女は、錆だらけの懐中時計を見て言っ

た。

「この時計、見ての通り、壊れ物なんです」とアユムは、時計のカバーを開けて、鉄くずが転がる白い盤を見せた。「これだけ古く汚くなる、修理することは最早叶いません。僕はこういう造りの時計が好きなんです、マン・ホームには、これの他には同じような時計が、数少ない展示物を除いて一つも見つからないんです」

「ほとんど、なくなっちゃったんですね」

「マン・ホームでこういう時計はもう、過去の物となっただけです。今使われているのは、デジタル表示で薄型の、新型の時計ばかり」

アユムは、愚痴を吐くようにそう言った。しかしそれがいかにも偉そうに分相応でないように思えて、彼はすぐさま新型を全否定するわけではないことを弁明した。

「だけど旧式の時計を知ってからは、不思議と、その便利さが味気ないと思うようになったんですね。妙に、こういう古い稀少な時計に、愛着が湧いちゃったとでも言うんでしょうか」

灯里は自分の壊れた懐中時計に視線をやると、アユムのそれと見比べてみた。片方は錆一つない明るいシルバーで、片方は錆にまみれて泥の中より拾ったような色をしている。同じタイプでも、二つの時計は極めて対照的だった。

彼女は、マン・ホームにいた頃の暮らしと、巷に溢れていた新型時計の様を思い出し、アユムの言に共感した。自分の持っているような時計が一つもない故郷は、やはり便利過ぎて味気ない気がした。

「分かるような気がします」と灯里は言っ、シルバーの懐中時計を胸の高さに持ち上げた。「流れる時間を大切にしようとする思いが、こういう綺麗な時計を見つめていると感じるんですね。多分、この時計を作った人は、時計そのものだけじゃなく、時間を美しく、愛おしくしたいと願って、こんな風に綺麗に作ってくれたんでしょうね」

「そういう考え方や価値観って、マン・ホームにはもうないですね」とアユム。「時計が占めるスペースは狭いし、時間はただ、昼と夜の長さを数字で表すだけです。だからいつそ、自分でこんな風な時計を作つてやろうと思いついたんですが、その作り方すら、マン・ホームでは

忘れられてしまってるらしくて」

それを聞いた灯里は、悲しみを秘めたような、遠くを見るような表情になった。

「それで、ある人の情報を頼りに、僕はアクアの時計屋に修行しに来た、というわけです」

灯里はアユムの旅の動機を理解した。

アユムは彼女に、何のツテもないのに時計屋を探して、受け入れてくれるところがあるかどうか不安だと吐露した。

灯里は彼の思いに共感した手前、きつと大丈夫だと励ましたかったが、根拠なくそうするのは無責任なように思われて出来なかった。彼女はただ心の中で応援し、アユムの不安でかたくなった表情を見つめることしか出来なかった。

◇

やがて二人は、ある小さな時計屋にたどり着いた。そこでは、マン・ホームでは有り得ないほど多種多様な時計の数々が、昆虫の標本のごとくずらりと陳列されていた。

「いらっしやい」と言つて、髭で口の周りを覆った店主は二人を迎えた。二人の他に、客の姿はないようだった。

「おや、灯里ちゃんじゃないか」と彼は彼女の来店を珍しがるように言った。「久しぶりだね。アリシアさんは元気でやってるかい？」

「はひ。今日も予約が一杯で大わらわです」

灯里と店主は元々知り合いらしく、会っていなかった間の情報を親しげに交換し合った。局外者のアユムは、そんな彼らの姿をはたで眺めながら、微笑ましいと思いつつも、幾らかの疎外感を感じずにはいられなかった。

やがて灯里は世間話を終え、壊れた懐中時計を店主に差し出す。

「このの修理をお願いしに、今日は伺ったんです」

「どれどれ」と店主は、時計を受け取りその具合を目で確認しだした。彼は時計のあっちこちを指でいじった後、「成るほど。こりや部品を変えた方がよさげだなあ」と言った。

時計の故障は単純ではないらしい。が、そこまで程度が重大なわけ

ではないようだった。

「直るまで時間はかかりそうですか?」

「いや、大した故障じゃなさそうだから、明日には終わると思うよ。それより灯里ちゃん、そちらのお兄さんは連れかい?」

店主がアユムの存在に気付くと、灯里はその名と、彼がマン・ホームからの旅行者であることを教えた。

「ほお、マン・ホームからわざわざ。それはどうしてだい?」

働かせて欲しいと言うべき時が、アユムに訪れようだった。彼は疎外感を味わった後で、余りいい心のコンディションではなかったが、到来したチャンスが無に帰すわけには行かず、兄アヤトの戒めを思い起こしつつ、「ここで働かせて欲しいんですけど」と告げた。

それを聞いた店主はきよとんとし、「お兄さん、正気かい?」と、特に馬鹿にするわけでもなく、彼が本気かどうかを真剣に確かめるように聞いた。

アユムは、「正気のもりです」と答えた。そして彼が、今はアクアにしか存在しない旧式の時計に憧れ、その作り方を学びたいがためにマン・ホームを発つたことを教えた。

店主は腕組みして困惑するようにううんと唸った。

灯里は、アユムと店主との間に、物々しい雰囲気があるかたなく漂っているように感じた。

しばらくした後、店主は「うん」と頷いた。

アユムはそれを承諾と受け取り、心の中で飛び上がりかけたのだが、店主の言葉は「申し訳ないが」とその後続いた。「うちはもう、人手は足りてるんだよ」

嬉びしたアユムは索然として、「そうでしたか」と答えた。

彼は最初の当てが外れたことを悟り、表情が冷めた。

灯里は顔を少し俯けて、アユムのその表情を怖々窺っていた。

「お兄さん、多分、他の時計屋をこれから当たるつもりなんだろう?」  
アユムは頷く。

「だろいな。今教えといてやるが、アクアの時計屋に雇用してもらったためにはな——まあ、これは時計屋だけに限らないんだが——アクア



の職業学校を卒業していることが必須条件なんだよ」

必須条件。まさかそんな公的な規約があるということをも、アユムは露も知らなかったので愕然とした。自分は時計屋を志望してはいても、マン・ホームの学校を卒業した身であるため、その条件に適っていなかった。

アユムは、アクアの時計屋で働きたいという願望を実現させるためには、時計屋を訪れる前に学校に通わなければならないことを知った。

そうするには長い時間のみならず、多くの金銭が費やされる。

店主の教えは、彼の心に絶望を生じさせた。

表情の暗いアユムだったが、苦勞して笑顔を取り繕い、「そうだったんですね」と言った。今はとにかく諦めるのが賢明だと判断したのであった。

「マン・ホームから来てくれたのに、悪いね。だけど、そういう決まりなんだ」

アユムは別れを告げると振り返り、目に楽しい旧式時計の数々が並ぶ店を名残惜しく後にした。

灯里は彼を放って置けず、店主に時計の修理をよろしくと頼み、別れを告げると、アユムの後を小走りで追った。

「アユムさん」と彼女は、彼の隣に追いついて笑顔で話しかけた。「他の時計屋さんに行きましよう?」

灯里の方へ振り向いたアユムの表情は、彼女とは対照的に暗かった。

「僕、今からマルコ・ポーロ国際宇宙港へ向かおうと思ってるんですが」

「そんな、たった一店ダメだったからって諦めるのは、幾ら何でも早すぎますよ」

「灯里さんも聞きましたよね? アクアの時計屋で働くには、それに相応しい学歴が必要なんです。それが僕には、欠格なんです」

「学歴の役割は、その人が知識を持っていると証明することだけですよ。やる気さえあれば、それを認めて雇ってくれるところがきつとあ

るはずです」

灯里がそう言った後、アユムは立ち止まった。彼女も同じく立ち止まり、彼が少なくともマン・ホームへとんぼ返りする恐れはなくなつた気がした。

「大切なのは」と灯里は言いかける。「学歴より何より、何かをやり抜いてやろうとする気概です」

灯里はそう言って、アユムが元気を取り戻してくれることを願つた。ところが彼は、陰気臭く失笑した。

「すいません。今の僕には、その気概さえありません。この星の決まりに逆らつてまで、本当に時計屋になりたいのか、少し自問する時間が欲しいです。ひよつとすると、僕は古い時計を作ることを、自分の生業じゃなく、憧れの対象として済ましてしまふべきなのかも知れませんね」

「わたしだって、ただの憧れだけで、ウンディーネになろうと思つたんです。学歴も知識も、技術もなく。元々舟を漕ぐことが得意だったわけじゃ全然ありません。だけどプリマに——一人前のウンディーネになりたいという気持ちは本物でした。今はまだまだ半人前で、地道に練習する毎日ですけど、後悔の気持ちは少しもありません」

灯里の断定の後、しばしの沈黙が二人を包んだ。アユムは葛藤し、灯里は彼の決断をじつと待った。

「本当に古い時計がお好きなら、諦めないであげましょう……?」

灯里は尋ねた。アユムは押し黙つたままだつたが、少し後、ぼそりと礼を言うと、一人立ち去つた。

影で真つ黒の彼の背中を見つめる灯里は、たとえそうしたくても、何となく気が咎めて、これより先までアユムを追つていくことは出来なかつた。

◇

夕日が赤く染まりだした頃、足任せに歩いていたアユムはある小さなカフェの前を通りがかり、そのテラス席で一服しようと考え椅子に腰掛けた。彼がその店で一服しようとした理由は、カフェ近隣の時計屋にあつた。その時計屋は、彼が灯里と一緒に訪れた店よりも規模

がやや大きく、離れたカフェの席からもどんな時計が並んでいるのかくつきりと判別出来た。

ウェイターが注文を聞きに来ると、アユムはコーヒー一杯だけを頼んだ。彼は間もなくやってきたその黒い飲み物を飲んで苦いと感じたが、大して苦にならなかつた。社会の厳しさの一端を知って落ち込んだ彼の心境に、コーヒーの苦味は好都合な刺激だった。

「本当に時計が好きなら、か……」、と彼は呟いた。

灯里のことを思い出したのだった。せつかく真心から励ましの言葉を掛けてくれたのに、アユムは冷淡な態度で彼女と別れてしまった。恩知らずな自分が厭わしかった。

灯里は気落ちした彼に、自分が同じような由来でアクアに来たことを強調して伝えた。アユムが時計屋に憧れてそうしたように、彼女はウンディーネに憧れて故郷を——マン・ホームを離れた。

灯里の言葉は今、アユムの心の中で重々しい残響を鳴らしていた。沈みつつある夕陽を見て彼は、本当にマン・ホームへ帰ってもいいかどうか自問した。未だ熱を持っている志を折っていいものかどうか、疑った。

すると、さつきまではそうするほかにように思えたが、今は別の選択肢が、アクアに留まるという選択肢が、ふっと、コーヒーの味で冴えた頭の中に浮かび上がってきたような気がした。

そして彼は、兄であるアヤトを思い出した。兄は今頃どこに着いて何をやっているだろうか思いを馳せた。

「少なくとも、僕みたいにマン・ホームへ帰ろうかどうか考えてるなんてことはないな。絶対に」

旅好きの兄で、すでに大人として色々な成長を遂げている彼が、たとえ旅の困難に出会っているとしても、そう簡単にくじけるとは思えなかつた。そんな性ではないと、その弟であるアユムは知っていた。

彼はポケットより懐中時計を取り出すと、目の前に持ち上げ、じっくり眺めだした。このために——このような時計を一から作ってみたくてアクアにやって来たのだと、確かめるようにみずから言い聞かせた。

すると突然、彼は、「もしもし」とある男に話しかけられた。アユムが時計より目を離し振り向くと、席のそばに、中年の小太りの男がカップの乗ったソーサーを手に立っていた。彼はグレーのヘアーを全て後ろに流し、鎖付きの眼鏡をかけている。

「同席しても、よろしいですか？」と、男は続けた。

アユムはうやうやしく肯定した。

男は席に座ると、甘い匂いのする飲み物に口を付け、フウ、と大きく息を吐いた。

「お兄さん」と男。「変わったアイテムをお持ちですねえ」

「懐中時計のことですか？」

「ええ。見たところ、相当古いお品のようですが」

アユムは苦笑し、「マン・ホームの捨て物なんですよ」、と言った。

「ほお。あなたはそれを、マン・ホームで拾ったと？」

「実際は違いますけど、拾ったも同然です」

「失礼ですが」と男は前置きを述べ、「どうしてそんなものを大事そうに持っておられるんですか？」と青年に問うた。

錆だらけの時計について尋ねられたアユムは、自分と時計の關係の由来と、アクアへ来た理由を男に教えた。

「成るほど。わざわざ時計屋になりたくて、アクアまで。いやはや、宇宙の旅は長くて大変だったでしょう？」

「マン・ホームとアクアの間には、約一億五千万キロの隔たりがありませんから。途方もない距離です」

「まったくです。しかし嬉しいなあ。時計を愛するがゆえにアクアまで足を運んでくれるとは」

それは皮肉に聞こえるような気がしたが、その大胆っぷりを褒められたアユムは、「大したことないですよ」と謙遜しつつも、内心で嬉しく思った。

「働かれる時計屋は、もう決まったんですか？」

「いえ、それが、断られたんです」とアユムは答えた。「アクアで時計職人になるには、アクアの学校を出てなくちゃ、いけないですよね」「うん。一応そういう規約はあるけどね」

「僕、やる気とか憧れだけで時計屋のおじさんに頼み込んだんですけど、ダメでした。無知で格好悪いですね」

アユムは自嘲的に苦笑した。

「他の時計屋を当たるつもりは、あるんですか？」

「他を当たったところで、同じ理由で断られることがほとんど明らかなので、マン・ホームへ帰ろうかと考えてたんです。でも、どうしても諦められない自分がいて、ここでコーヒーを飲んで、じつと悩んでるんですけど」

それを聞いた男は、顎を持って考えだした。アユムは彼をじつと見つめていたが、やがて男は、「少し驚くことをお兄さんに教えて上げよう」と言った。「実を言うとなたしは、時計屋をしてるんだ」

アユムは急な暴露に、予想された通り驚きポカンとした。

「驚いたね、やっぱり」

「ほ、本当ですか？」

「ああ。証拠はあそこにある店だ」

男は指をさつきアユムが気に留めた時計屋の方に指した。すると時計屋のカウンター内に立っているスタッフが朗らかな笑顔で手を振ったので、男も手を振り返した。

アユムは困惑した。男のした暴露は余りにも唐突過ぎたため、彼は、働きたい旨を願い出ようか、それとも気恥ずかしさでそそくさ立ち去るか迷い、心の中に激しい葛藤を引き起こした。

灯里の励ましの言葉が、彼に立ち去ることを選ぶことを禁じたが、アユムは再び断られることを恐れ、働かせて欲しいとは中々言いにくかった。

だが、彼の葛藤は気を使った店主の言葉により解けた。店主は、「君、うちで働いてみるかい？」と言ったのだった。

アユムはそれが予想だにしない奇跡の言葉だったため、一瞬耳を疑った。

「うちで、時計作りを学んでみるかい？」

「それは、願ってもないお言葉なんですけど、いいんですか？ 僕、学歴も時計屋の勤務経験も全然持ってません」

「それは大した問題じゃない。わたしは、君が懐中時計を大切そうにしている姿を見た時、心の中にある憧れを知って、その可能性に賭けてみたいと思っただ。それに、スクールの紹介状が必須だという規約は、それが紹介先とのやり取りをスムーズにしてくれるからというだけで、実質的な必要性は低いんだよ。スクールを出ただけで出来ることなんて、高が知れてるからね」

店主の粹な計らいで、アユムの願いは叶うことになったのだった。彼は感慨無量になった。感謝の気持ちはとめどなく溢れ出てくるのに、上手くそれを言葉に変換することが出来なかつた。

「スクールの紹介状の代わりに、僕は別の条件を出そう。それは、早く知識を付けて腕を磨いて、一人前になること！」

店主の激励に、アユムは目に涙をためた。

「ようし。今日は前祝いだ。ここでの代金はわたしが持つよ。君は早く、あすこにあるわたしの店に荷物を全部持っていきなさい。あのスタッフ——ヨシと言うのだが——に声をかければ、案内してくれるだろうよ」

アユムは了解すると、ただ今より彼のボスとなった店主のもとに歩み寄り、かたい握手を交わした。

そしてスーツケースを引いて近くの時計屋に向かい、そこでスタッフのヨシに挨拶し、自分が泊まる部屋に連れていってもらった。

彼はアユムと同年くらいで、とても親切に彼に接してくれた。

「新しい後輩が出来て嬉しいなあ。俺はヨシ。これからよろしくな」  
「僕はアユムって言います。まだ時計については全然知りませんが、一生懸命学んでいくつもりなので、よろしくお願いします」

「気合充分だなあ」と彼は感心した。「だけど今からそんなじゃすぐに疲れちまうぜ？ 今日とはとにかく部屋でゆっくり休みな。工房や仕事の詳細、休日の割り当ては明日するよ」

アユムとヨシは、固い握手を交わした。

アユムはそれから食事や風呂について教えてもらい、しばらく休んだ後、店長とヨシと他のスタッフ達と、近くの料理屋に集まり、そこで小さな歓迎会に参加した。歓迎会でアユムは、みんなに自分の名前

や趣味を知ってもらうだけでなく、彼も、他の仲間たちのことを色々  
と知った。アユムは入って間もない時計屋のメンバーに、最初は遠慮  
がちにはにかんでいたが、やがて馴染みだしたようで、満面の笑顔に  
なった。

意気をくじかれ、陰気臭い終わりを迎えそうだったその日だが、一  
転し、華やかに終わることが出来たようだった。

◇

「よかったです。アユムさんが、マン・ホームに帰ることにならずに  
済んで」

そう、灯里は言った。彼女はある女性とアユムとを乗せて、水路で  
ゴンドラを漕いでいた。

その女性は、ブロンドの長く艶やかな髪を、後ろでフィッシュボー  
ンっぽく凝った感じで編んでいる。彼女は灯里に「アリシアさん」と  
呼ばれていた。つまり彼女は、灯里が言っていた例の、ARIAカン  
パニーのトップの妖精というわけだ。

晴れた空の下、幅広い水路で三人は心地よい風を浴びながら、澄ん  
だ空気を吸い込んで、空気が含む薄い英気の、身体中に充溢するのを  
感じた。

「灯里ちゃんの話聞いてわたしも心配だったけど、本当によかった  
わね」

アリシアは、大人びた調子で灯里の言葉に添え、アユムの希望の成  
就を喜んだ。

「お陰様で、憧れの時計屋で働くことに決まりました」

アリシアは優雅にウフフ、と笑った。

「アユムくんの話聞いた時、灯里ちゃんが初めてARIAカンパ  
ニーに来た時のことを思い出したわ」

「わたしも、自分がウンディーネに憧れてアクアに来た時のことや、ア  
リシアさんに初めて会った時のことを思い出しました」

「あれからどれくらいの間が経つのかしらねえ……。ずいぶん前の  
ことだと思うけど、灯里ちゃんはまだ半人前で、ゴンドラの漕ぎ方に  
相当癖があるわよね」

アリシアの仮借ない口振りに、灯里はエエーと嘆いた。

アユムは彼女の表情を見て笑みがこぼれ、「している仕事は違えど、僕は灯里さんよりもっと未熟ですよ」と言った。「技術はもとより、知識だってまだまだ半端なんですから」

「だけど、きつと二人とも、これから大きく、立派に成長していくのよね」

アリシアは、雲が点々と浮かぶ高い空を見上げてそう言った。

「早く腕を上げて、一人でお客さんを乗せられるようになりたいです」と灯里。

「ぼくも、早く腕を上げて、一人で自分モデルの時計を作ってみたいです」とアユム。

同じように意気込んだ彼ら二人は、互いに微笑み合った。

そんな二人の姿を、最も年長のアリシアは優しい姉のように頬を緩ませて眺め、彼らがそれぞれの挑戦に成功し、幸せを掴むことを、期待し、また祈るのであった。

(完)



## 灯里編

### 【2】ある波乗りと（前編）

\*  
\*

つばの長い山高の帽子は、少女の顔を影で覆っていた。  
少女は二人。

一人は柔らかな表情に子どものようなあどけなさが残っていて、もう一人は二十に満たない年齢なのに、その微笑はすでに成熟した大人の色気と風格を帯びている。

姉妹のように年が近いのに、互いに雰囲気の対照的な彼女らは、灯里とアリシアだった。

二人はボートの屋上で海の景色を眺めている。

「見えてきましたよ」と灯里は、正面に佇む小さな島を指差し言った。

「あれですよね？ わたしたちがバカンスで過ぐす島は」

「ええ、もうすぐ着くわね」とアリシアは答えた。

ウンディーネとして働いている灯里とアリシアは、東の間の夏休みを取ってネオ・ヴェネツィアを離れてとある島へと向かっていた。

彼女らの務めるARIAカンパニーは、現在CLOSEDと記された札が表にかけられている。

モーターの音を轟かせながら盛んにしぶきを上げるボートは、紺碧の海上を高い速度で突っ切っていった。

◇

昼下がりの時分、灯里とアリシアが着いたのは人家の少ないのどかな雰囲気の島だった。

二人は荷物を持ってボートと船着き場を降り、岸に立った。

砂浜の先には、ジャングルがよく手入れされた状態で鬱蒼と広がっており、その中には人工の平たい道路が敷かれていて、奥に向かって伸びている。

彼女らはその道路を歩いていき、宿泊施設のログ・ハウスが散点し

ている広場に出た。

そしてチエック・インするため、アサトという若い管理人のいるログ・ハウスに行った。それは広場の一角にある小さな一棟であった。木の香りの漂う室内は涼しく、あちこちに葉の大きな観葉植物が置かれており、ウツディーな空間を生き生きと彩っている。

アサトは、テーブルに向かって事務仕事をしていた。

彼は灯里とアリシアの入ってくるのに気付くと、ペンを置いて彼女らの方を向いた。

アリシアは挨拶して名乗った後、「今日から二日間お世話になります」、と言った。

「ああ」と彼は驚いたように発した。「予約してくださったネオ・ヴェネツィアの方ですね。お待ちしました」

アサトは席から立ち上がり、愛想のいい表情で二人へ近付いて自己紹介すると、アリシアと少し世間話を始めた。

アサトはこの島の気候や生態などの特徴を、アリシアは自分たちがウンディーネという仕事をしていて、ネオ・ヴェネツィアの水先案内人であることを、それぞれ教え合った。

二人が話し込んでいる間、灯里は黙然として、ある疑問に考えを傾けていた。それはアサトの身体の一部に関することだった。

すなわち、彼は義肢——作り物の腕を装着しているのである。彼の片腕の肘から手にかけての範囲が、まるでロボットのようメカニカルな見た目をしている。

灯里は、アサトがどうしてそのような腕をしているのだろうと、見るともなしに見つめながら考えていた。

義肢に関して彼は、まるでそれを生まれつき身に着けているかのよう自然と振る舞った。

灯里は、アリシアが時々義肢を一瞥することに気付いていた。要するに、彼女も同じことが気になっているのである。

やがて会話は終わり、アサトとアリシアはチエック・インの手続きに移った。一枚の用紙に必要な事項を記入するだけだったので、特に手間は取られなかった。

アサトとの会話と宿泊の手続きが済んだ後、灯里とアリシアは自分たちの寝泊りする一棟へ移動しだした。

管理人のログ・ハウスを出てすぐ、灯里は「アリシアさん」、と呼びかけた。「アサトさんって、怪我でもしたんでしょっか？」

「あの腕のことよね」、と彼女は答えた。「何が原因でああなったんでしょっか？ 事故とか病気とか、幾つか考えられるけど、詳しいことは分からないわ」

アサトの義肢の由来が気がかりだったものの、二人はログ・ハウスに着いて主に丸太で出来たその外観に感嘆すると、ひとまず忘れ去った。

扉を開けて屋内に入った灯里は、木の優しい香りを嗅いでうっとりし、木製の家具と薄褐色の内装に目を楽しませた。アリシアはそんな彼女の無邪気な姿を見て微笑した。

二人はふかふかのベッドに横になって伸びをし、しばらくの間船旅の疲れを癒すと、その後は宿泊所近辺のジャングルを散策して夕方の時間を過ごした。

ジャングルの中は管理が行き届いているためか、大人しく可愛らしい小動物が時々見かけられ、鳥のさえずりが響く平和で快適な環境だった。

彼女らが夜食に何を食べようか相談しながらログ・ハウスに戻った頃、日は沈んで、蒸し暑い熱帯夜が訪れた。宿泊所の界隈に電灯はないが、かがり火があちこちで焚かれているので不便でない程度に明るい。

灯里とアリシアは近くの売店で新鮮な海産物を含む食材を買ってくると、キッチンで協力して調理し、夜食を取った。その後はデッキに出てプラネタリウムで見るような満天の星に見入り、風呂に入った。木造の浴槽に張られたお湯の中で、彼女らは極楽の気分を味わった。

そして身も心もさっぱりとした二人は、寝巻きを着てベッドに入り、その日を穏やかに終えたのだった。



翌日、晴れ晴れとした夏の炎暑の日和、灯里とアリシアは島のビーチにいた。

灯里はビキニタイプの空色の水着を、アリシアは同種の白い水着を着ている。

彼女らは海水浴を楽しむためにやってきたのだった。

海は爽快な様相である。水色の宝石を溶かしたように澄んだ海水は、盛んに波を起こし、繰り返し砂浜に白い泡をたくさん運んでおり、また水平線の彼方からは、温かい潮風が緩やかに吹いてきている。

灯里は手をひさしにして海を眺めると、「綺麗ですねぇ」と言った。「そうねぇ」とアリシア。

ふと二人は、沖の方に一人の人間がいることに気付いた。

目を凝らして見てみると、驚いたようにアツと発した。その人間は、管理人のアサトだったのである。

海パン一丁の彼は、ボードに乗ってサーフィンしている途中で、続々と立つ大波小波のすぐ前を横切るようにして、身体のバランスを器用に保ちながら滑っている。

灯里は「アサトさん、上手に乗ってるますねぇ」と感心し、アリシアは「きつと得意なんでしょうね」と言った。

二人はアサトの颯爽たる姿にしばらくの間目を奪われていた。巧みに波乗りしている彼は、幾らか危なっかしい感じがあるものの、真剣でありまた楽しげで、その姿は見ていると自然と自分も楽しくなれるような生き生きとしたものだった。

——小山のように盛り上がった波のすぐ前でアサトは今、自然の躍動感に快く浸っていた。

波乗りは彼の日課と言うべきことだった。彼はしょっちゅう使い慣れたサーフボードを持って海へ行く。そしてボードに腹這いで乗って沖まで泳いで、波のドライブに乗って速く滑る感覚に満足して帰るのだ。荒天で断念させざるを得ない日などには必ずストレスを感じるほど、彼はサーフィンに入れ込んでいた。

灯里とアリシアに見守られつつ、アサトが一つの波を乗り終えてボードを降りた後、かなり大きい波——「メートルは優に超すくらい

の波が立った。

彼は徐々に近付いてくるその波をキツと睨み付けると、手ごわそうなその波にサーフィンを挑もうとその直前に泳ぎ出、ボードの上に立った。ところが彼は、強い勢いに押されてバランスを崩して倒れ、水中に没してしまった。

その経過を見た二人はアツと声を上げた。

「失敗しちゃいましたね、アサトさん」

「心配ね。無事なのかしら？」

不意に灯里は、浜辺まで来る大波の表面近くに平らなものが浮かんでいることに気付いた。よく見てみると、それがアサトのサーフボードだと分かった。滑り出した時の慣性で浜辺まで来てしまったのだった。

しばらくして大波は、一際多い泡を砂浜の上に広げると、中のボードを吐き出すように打ち上げた。

灯里はその近くに向かい拾い上げると、アサトが取りに来るのを待った。

水中に落ちていた彼は、やがて水面上に頭を出し、水気を振り払って目を開くと、ボードを持っている彼女のもとへ泳いで向かった。

「大丈夫ですか？」、とアサトにボードを返した灯里は、ビシヨ濡れの彼に尋ねた。彼は大丈夫だと答えると、「恥ずかしいです」、と言った。

「波乗りには失敗して転げるところを見られるなんて」

「格好良かったですよ」、とアリシアはそのテクニックを賞賛した。

「しばらく見てましたけど、アサトさん、波乗りがすごく上手なんです」

アサトは「そんな、上手なんかじゃないです」、と苦笑すると義肢を見せ、「結構苦勞するんですよ。この腕で、波の上でバランスを取るのには」、と言った。

肉体でない作り物の腕だと、どうしても風の感覚が伝わりにくいようだった。

彼の哀愁を含む表情を見て灯里とアリシアは、やはり義肢には不便があるのだな、と合点が行った。

「波は手強いですよ」とアサト。「でも、段々乗り慣れてくれば、これがスリリングですこぶる楽しいんです」

そして彼はニコリと笑み、灯里に向かって「一度挑戦してみませんか?」、とサーフィンに誘った。

彼女は「エエー!」、と驚きの声を上げた。「わたしがするんですか!」

アリシアは微笑し、「あらあら、灯里ちゃんはチャレンジャーね」とからかうように言った。

灯里は何度も首を振って遠慮したが、アサトは一切構わず、「向こうへ行きましょう」と言って、彼女の腕を掴んで引いていき始めた。

「向こうでは波が穏やかで、初心者練習には打って付けですから」しばらく押し問答が続いたが、やがて灯里は同行せざるを得ないことを観念し、アサトの導きに従った。

アリシアは優雅な微笑みを浮かべて手を振り、二人を見送った。

◇

波打ち際に沿ってしばらく歩いていった別の浜辺に、灯里がポツンと佇んでいた。アサトは彼女のためにボードを取りに行っており不在だ。

その浜辺は彼の言った通り、波が比較的小さくサーフィンをしやすいうようだった。

とは言っても、半ば強引に引き連れてこられた灯里は上手く出来る自信がなく、憂鬱そうにハア、とため息を吐いた。元来余り身体を動かす習慣のない彼女は、サーフィンはもとより他のどんなスポーツとも無縁だった。

「不安そうな表情ですね」と言う声がした。アサトがボードを持って戻ってきたのだった。「大丈夫ですよ。ちゃんと手ほどきしますから」

灯里は苦笑し、「わたし、運動は苦手かも知れません」と答えた。「それでも大丈夫です」とアサト。「サーフィンって、駆けっこや球技と違って純粹な運動じゃないと思うんですよ。波の上でバランスを取るだけですし」

アサトはそう言うと、両端が尖っている紡錘形の長いボードを灯里に渡した。

彼女は、「でも」と頼りない感じで言った。「わたし、経験が全然ないんです」

アサトは首を振って、「サーフィンしている人間を見ただけでも、十分な経験ですよ」

彼の言ったサーフィンしている人間というのは、自分のことだった。

アサトだけでなく灯里もサーフボードを持つと、次は準備体操に取り掛かった。二人とも、海で筋肉が引きつったりしないよう、四肢をよくよく伸ばした。

黙々と体操している途中、「この間<sup>かん</sup>」とアサトは灯里に対し言った。「頭の中ではサーフィンしてるイメージを繰り返し思い描いてくださいね。僕がしていたような感じで結構です。失敗しましたし、イメージの材料として丁度いいでしょう。あんな風に波に乗り損ねた時にパニックに陥らないよう、ぜひ成功のイメージだけじゃなく、失敗のイメージも思い描いてください」

体操とイメージトレーニングが終わった後、二人はそれぞれ自分のボードをわきに抱え、海へと入っていった。そして沖の手前のまだ浅いところまで歩いていくと、サーフィンを始めた。

灯里にとって波乗りは、やはり困難なことだった。初めてで慣れない灯里は、何度もしくじり、相当な数の失敗を重ねた。しよっぱい水をたくさん飲んだり、身体を水面に激しく打ち付けて痛めたりした。彼女はそのたびに必ずバツが悪そうに苦笑したが、アサトにアドバイスを受けてコツを学んでいく内に、表情が真剣に変わり、失敗しても苦笑しなくなった。次第にしくじりが少なくなつて、無駄な動きが削がれていった。

そしてとうとう、何回かに一回の低い確率であるが、波乗りに成功出来るようになった。

「わあ、凄いです!」、と灯里は声高に叫んだ。「わたし、波に乗ってます!」

彼女は泡立つ波頭のすぐ前を、うまく両手でバランスを取って滑りながら、至福の笑顔を見せた。

乗りこなせるのが低く弱い波ばかりであっても、灯里は心底喜び興奮した。そんな純粹な姿を見て、海にプカプカと浮かんでいるアサトは微笑ましく思った。

灯里が成功した場合、彼は「その調子です」、と応援し、失敗した場合には、「ドンマイ」、と励ました。

慣れてくると、アサトは時々灯里と並んで滑ったが、その時は彼女がよく転けた。彼は毎度滑り去っていった灯里のボードを取りに行き、彼女に返した。

灯里はある程度やり方を物にしたサーフィンに熱中し、満面の笑顔で興じた。その笑顔は眩しく、楽しさや嬉しさなどの感情が弾けていて、アサトはサーフィンに誘って正解だったと思うことが出来た。

その内、時は夕方になった。紺碧だった海は、夕闇に黒く染められた。波はしずまり、サーフィンの出来る時間は終わった。

浜辺に引き上げた後、灯里とアサトは二人並んで座り、休憩がてら水平線上の燃えるような夕焼けを眺めだした。

「サーフィンに挑戦してみた感じはどうですか?」、とアサト。「とつても楽しかったです」、と灯里は笑顔で答えた。

それから二人はサーフィンについて話し合った。灯里はよりうまくなる方法を興味津々な様子で質問し、アサトはそれを詳しく教えてやった。

その途中、灯里はふとある物に目が行った。それは、浜辺近くの木立の中にある小さなボートだった。ボートは小屋から張り出した屋根の下に置かれている。

灯里は一旦サーフィンのことは忘れゴンドラを思い出すと同時に、何となく漕ぎたい気持ちがウズウズしだし、ボートが自由に使えるかどうかアサトに尋ねてみた。彼は肯定すると小屋に向かい、オールと共に一艘を波打ち際まで運んで、その上に浮かべた。

二人は少しだけ気晴らしに海を回ることにして、ボートに乗り込んだ。



灯里は船尾に立ち、上手に漕いで見せようと意気込んでオールを構えた。ウンディーネとしての自負がある彼女は、自分が得手とする操船術を披露し、サーフィンの指導者を感じさせるつもりだった。

アサトが座席に腰を下ろすと灯里は、馴れた手付きでオールを操り、ボートを砂浜より離れた深みまで進めた。

夕べの海は静かに凧いでいた。のみならず真昼の暑さが和らいでもいるので、灯里は快適に、思い通りに舟を運んでいくことが出来た。「やっぱりお上手ですね」とアサトは灯里の操船術を称えた。

灯里は喜ばしげに微笑む一方で、「わたしなんてまだまだです」と謙遜した。「こんなにスムーズにボートが進むのは、ここが広い海で、しかも波がないからです。ネオ・ヴェネツィアの狭い水路だところは行きません。対向してくる舟があったりしますしね」

そう言った後、灯里は一度ボートを漕いでみないかとアサトに誘いかけた。彼女の心中には、サーフィンを教えてもらったお礼に、操船術を教えて上げようという意図があった。灯里は未だ見習いの身であるが、初歩的な技術の手ほどきであれば何のことはなかった。

その誘いに、アサトは遠慮がちに頷いて、「じゃあ少しだけ」と答えた。そして灯里と交代してオールを受け取ると、水に差して漕ぎ出した。彼の操船術はぎこちなく、やはりその道の者には遠く及ばないものの、どうかボートは前向きに進んだ。

アサトはしばらくオールの捌き方を心得るために意識を集中し、無言になった。ボートの座席に腰を下ろしている灯里は、そんな姿を微笑んで見守り、折に触れてアドバイスの言葉をかけた。

「何だかこんな風にボートを漕いでいると、昔を思い出します」と操船に慣れだしたアサトは言った。

灯里は首を捻り、ボートに関して何か思い出があるのかと彼に尋ねた。

「ええ」と彼は肯定した。「実は僕、航海士ふなのりをやってたんです。こことは別の島に住んでた頃にね」

アサトの経歴を知った灯里は、意外に思ってた驚いた。

話によると、彼の昔乗っていた船は、ゴンドラや水上バスよりも大

きく、またオールじゃなくエンジンで動く類のものだった。だがそれでも、小さなボートに乗って周りの波を見下ろしていると、かつての情景がまざまざと蘇ってくるようだった。

「真つ白なセイラー服を着て、船を操舵するだけじゃなく、甲板で見張り番をしたりしてたんですよ。もう辞めちゃったけど、同僚のみんな、今も元気でいるかなあ」

アサトは当時の仲間の姿を思い返して言った。

灯里は、どうして彼が宿泊所の管理人になり、航海士の仕事に携わらなくなつたのか、そのわけを尋ねた。

アサトは微笑し、「事故のせいです」と答えた。そして彼は、オールを動かす腕を止めた。「うっかりデツキから、足を滑らしちゃったんです。その時は運悪く、体調が悪い上に海が荒れててね。船に乗り慣れていた僕でも酔いました」

そして彼は、波に揉まれながらで船上の仲間の助けを心待ちにしていたのだが、その間にサメに襲われ、腕を食いちぎられたことを教えた。仲間は急いで救出しようとしたが、惨事を防ぐことが叶わなかった。

漕がれなくなつたボートは徐々に速度を落とし、やがて停止した。その上で灯里は、アサトの悔しさや悲しさを含んだ表情を見て気の毒に思うと同時に、自分が凶暴な魚に襲われる場面を想像してゾツとした。

彼はオールから義肢を離し灯里がよく見えるようにして、「それで、こんな腕になつてしまったというわけです」と自嘲気味に言つて、その由来の話締めくくつた。

灯里は表情をこわばらせたまま何も言えず、沈黙する二人の間には居心地の悪い陰湿な雰囲気 が漂いだした。

間もなくそれを察知したアサトは気まずそうに苦笑し、すぐにオールを再び動かして、ボートを進めだした。

「海というのは、ものすごく怖いものです」とアサト。「そんなこと、自分では充分理解しているつもりでしたが、認識不足でしたね。事故で改めて思い知つて、反省させられました。以降僕は、怖くて沖まで

出ていくことが出来なくなりました。航海士を辞めて、長年連れ添った仲間に別れを告げなければいけませんでした」

慣れた仕事を辞めたアサトは、生活を一新して再出発するために、それまで暮らしていた島を単身で去った。

「おかしな話ですよ。以前は海が主な生活の場だった僕が、今はジャングルのような森の中に住んでるんですから」

アサトにそう言われても、灯里は依然として間が悪そうにしており、彼の問いかけに対しては辛うじて曖昧な言葉で答えられるばかりであった。

「多分、灯里さんは」とアサト。「海が怖いと言う僕が、どうしてサーフィンで沖まで出るのか、不思議がってますよね?」

問われた灯里の心中には、確かに彼の矛盾への疑問があった。海で惨たらしい事故に遭い、海に対して大きな恐怖心の芽生えたアサトが、どうして毎日のように沖まで泳いでサーフィンをするのか、怪訝に思った。

「自分でもよく分からないんですけどね」と彼は苦笑して言った。「その矛盾は、きっとコンプレックスのせいなんだろうなあ、なんて考えてます。僕はつらい経験をしたけれど、やっぱり海に愛着を持っているというのか、固執してるんでしょうね。別の島に移住して、木々の中で生活しだしても、海から離れられないんですよ。それにサーフィンをしていると、不思議と恐怖心を忘れて、嫌な思い出を思い出さずに済むんです。波の上を速く滑ることが出来れば、仮にあのサメがまた現れたとしても、逃げ切れるんじゃないかって思っ——馬鹿馬鹿しいですよ、そんなの」

アサトはみずから蔑んだが、灯里は「そんなこと、ないです」と否定した。「怖いという感情と向き合って自分の弱さを見つめられるアサトさんは、強い人だと思えます」

彼女は彼の過去を思っって憂鬱な心境だったが、明るく朗らかになっているその表情を見、塞いだ気分を和らげることが出来た。また自分がもし同じ目に遭えば心がすっかり萎縮してしまう事故の後でも気強く生きているアサトの姿を立派と感じ、敬意を持った。

だがアサトは苦笑し、「僕は強くなんかないですよ」と否定した。そしてアサトは口を噤み、自分が灯里のしてくれたような賞賛に値しないことを確かめた。

彼はどれだけ自分が弱く、ビクビクと海を怖がっているか考え、じつと海の中を見つめた。すると、彼の視線の先で揺れる海面に、何かある物が浮かび上がってきた。それは黒っぽい魚のヒレであった。アサトはにわかには嫌な予感がし、自分が今、かつて乗っていた船の甲板にこのような気がした。海は荒れており、頭は船酔いでクラクラしている。だが、アサトは責務を全うするために我慢強く立ち、黙然と水面に視線を注いでいる。

ヒレだけ出していた魚は、やがて全容を表した。それは、口の周りに血痕をこびり付けた獯猛な魚——サメであった。サメは彼に真っ黒な空洞のような目を向けると、すぐにその赤赤とした口をグワツと開いた。

辺りはシンと静まり、その口は、どんどん自分の方へ近付いてくるように大きくなり、やがてアサトは目の前が真っ暗になりかけた。

「——アサトさん？」

灯里に呼びかけられてようやく、彼は我に返った。アサトは、既視感のある恐ろしいビジョンに襲われて、しやがみこんでしまったのだった。

「すいません」と彼は言っ、立ち上がった。「一瞬、怖い幻を見てしまった」

臆してしまったがためにこれ以上漕げなくなったアサトは、灯里にオールを渡し、交代した。彼は義肢と生身の腕の境目が痛むらしく、無傷の方の腕でギュツと握った。

アサトが一体何を見たのか知らないが、灯里はすくんだ様子の彼を励ますように、「また明日、サーフィンしましょう?」、と言った。

「サーフィンすれば、アサトさんはきつとまた、元気になれますよ」

しかしアサトは、「そうですね」と懐疑的に苦笑した。

灯里は自信満々に頷いて、「なれますよ」と答えた。「だってアサト

さん、サーフィンしてる時、すっごく生き生きしてますもん。初めて見た時は、まさか海に対して恐怖心があるなんて少しも思いませんでしたよ」

アサトは朗らかな声を上げて笑い、「夢中になってますからね」と言った。「サーフィンしてる時は、何もかも忘れて」

「ですよね」と灯里。「わたしも、アサトさんが教えてくれたお陰でサーフィンに夢中になりました。あんなに楽しいことが上手に出来るんです。アサトさんは海を怖いと思ってるんじゃないかと、やっぱり、本当は好きなんですよ」

彼女に言われて、彼はハツとした。人懐っこい笑顔で灯里は向けてくれているのに、アサトは何となく決まりの悪い心地になり、表情がかたくなった。何か始末が悪い感情が胸中にきざし、それが自分の未だ詳しく知らない感情なので、処理に困ってしまったのだった。

だが、彼は無知であっても、少なくともその複雑な感情が、灯里と緊密に結び付いていることには確信が持てた。

灯里は上を見上げ、「そろそろ帰りましょうか」と言った。

オレンジ色だった空は今、紫色っぽくなっており、夜の訪れが近いことを教えている。

灯里はボートを浜辺の方に向けて進めだした。

戻る途中、彼女は誰かが浜辺に立っている姿を見つけた。それはアリスアだった。彼女は灯里を迎えに来たのだった。夕方になり涼しくなりだしたせいとか、アリスアは薄い上着を羽織っている。

彼女に対し、灯里は「アリスアさくん!」、と声を上げて手を振り、アサトは振り返って軽く会釈した。

「灯里さん」と彼は元に向き直して呼びかけた。彼女は彼と目を合わせた。「明日には、ネオ・ヴェネツィアに帰っちゃうんですよ?」

「はひ。もう一度海水浴した後、夕方のボートに乗って帰る予定です」  
「じゃあ、明日までにぜひ考えたい欲しいことがあるんですが」

「考えたい欲しいこと?」

「ええ。ちよつと、言いづらいことなんですけどね……」

アサトは中々その後を言わなかった。彼のモジモジしている表情

を見た灯里は、小首をかしげ、笑顔で「何でも仰ってください」と促した。

そのお陰でアサトは決心が着いたらしく、頬をやや引きつらせながら、「考えて欲しいことというのは、つまり」と言った。「灯里さんが、僕と付き合ってくれるかどうか、ということですよ。恋人として」

灯里は呆気にとられてポカンとした。アサトは、プロポーズの言葉を言ったのである。

アサトは、灯里に好感を抱いていたのだった。

チエック・インの手続きで初めて出会った時にも、確かに彼は灯里を好ましいと思った。だが、それは単なる平面的な印象に過ぎなかった。ところがそれが、一緒にサーフィンをし、ボートで海を巡って話し合っている内に、恋心にまで発展したのである。

灯里の物腰の柔らかさ、優しい雰囲気に対して抱いたアサトの親近感、充実感を感じているようにボートを漕ぐ姿を見て憧れることで、より高い次元の慕情に高められた。

ボートは浜辺にかなり近付いていたが、アサトのプロポーズの言葉はアリシアには聞こえなかった。呆気にとられている灯里の表情が見えたものの、彼女はそれには特に気に留めず平静に彼らを迎えた。

灯里とアサトは、ボートを降りた。

「おかえり、灯里ちゃん。アサトさんと二人で船旅をしたのね。楽しかった？」

アリシアは尋ねたが、灯里は茫然としたまま何も言わなかった。

アサトは微笑し、「灯里さん、少し酔っちゃったみたいです」と言っ

た。「あらあら。ネオ・ヴェネツィアの水路と海は違うからね。無理もないわ」

アリシアは灯里の腕を握ると、アサトに別れを告げて、ログ・ハウスの方へ歩きだした。灯里は抜け殻のような状態で、アリシアに引きずられるようにして歩いた。

アサトは、去っていく彼女らを笑顔で見送った。

しばらくして二人の背中が見えなくなると、アサトは笑顔を困った

ように崩し、ボートを小屋のそばに戻して、自分もログ・ハウスへ戻るのだった。

彼の心中には、唐突に灯里にプロポーズしてしまったことへの反省が少しあった。

(続)

### 【3】ある波乗りと（後編）

◇

夜。灯里とアリシアはログ・ハウスに帰り着いた後、夜食の準備をし、室内のテーブルで食べ始めた。

その間アリシアは灯里に対して、違和感を感じていた。

浜辺で再会して以来、灯里がずっと放心状態のままなのである。箸使いは普段よりぎこちなくて、よく皿の食べ物を掴めずに落としたり。アリシアが「灯里ちゃん？」、と問うた時は必ず彼女は「はひ」、と答え、頭脳明晰になるのだが、すぐにまた放心状態に戻ってしまうのだった。

灯里とアサトの間に何かただならぬ出来事が生じたことを、アリシアは明敏に感付いていた。みずから進んで話さない灯里の様子は、それがシヨツキングな出来事であるに違いないことを彼女に推測させた。

夜食の後、二人はお風呂に入った。そして身体の汚れをシャワーで軽く洗い流した後、満々と張ったお湯に浸かった。

灯里は深いため息を吐き、「温かいですねえ」、と言った。「何だか、今日は長かったように感じます」

その様子には、何となく彼女の意識が明瞭に回復しだした感があった。

「充実してたってことじゃない？」、とアリシア。

灯里はエヘへ、と脱力したように笑うと、「確かに、そうかも知れないですね」、と答えた。「生まれて初めて、サーフィンにチャレンジしたんですから」

「波乗りは上手に出来た？」

灯里は首を振った。

「最初は全然出来なかったです。波の勢いが強くて、ボードの上でバランス取るのが難しくくて。でも、アサトさんがトレーニングしてくれたお陰で、何とか小さい波には乗れるようになりました」

浴槽の縁に両腕を置いて二人は、夜食の時間出来なかった分を取り



戻すように、じっくり色々話合った。

灯里はサーフィンのことを一通り話した後、アサトが昔航海士であったことや、その時期にサメに襲われるという事故に遭ってしまったことを教えた。

アリシアは、その事故のせいで彼が義肢になったことを知りショックを受けた。

「そんな事故に遭ったのなら、海が怖くなるのも無理はないわね」

「だけどアサトさん、すごいんですよ」と灯里。「サーフィンすることで海への怖さと戦ってるんです。もしわたしが同じ事故に遭ってたら、絶対に二度と海へは近付けなくなるんじゃないかなあ……」

灯里の顔は、若干赤らんでいた。かれこれ三十分近くは、お湯に使っていたのだった。

彼女は目をつむって腕に首を乗せると、「少し、眠くなってきました」と呟いた。

アリシアは桃色のその顔を見ると微笑し、「上がりましょうか」と言って、立ち上がった。「あんまり長湯しすぎると、湯あたりしちゃうからね」

そして二人は浴室を出、身体の水気をタオルで拭うと寝る準備に取り掛かった。

「今夜はこの島での最後の夜ね」とアリシアは言った。寝巻きに着替えた彼女は、日中とは違いメガネをかけている。

「そういえば、そうですね」と、同じく寝間着姿に変わっている灯里は答えた。

「少し、デツキに涼みに出しましょうか？　今夜は昨日ほど蒸し暑くはないみたいよ」

灯里は頷くと、アリシアに先へ行っていて欲しいと頼まれたので、部屋の端の大きなガラス戸を開け、デツキへと出た。

明るい室内の外の暗がり、灯里は満天の星の輝きに見とれた。

遅れて来たアリシアは、お盆を持っていて、その上には、瓶とグラスとランタンが乗っている。瓶は二本あり、片方は果物のカクテルで、もう片方はジュースだった。

彼女はそれをテーブルに置くと、灯里と向かい合って座った。

「はい、灯里ちゃん」とアリシアは、ジュースの入ったグラスを彼女に差し出した。アリシアはカクテルの入ったグラスを手を取った。

二人は笑顔でグラスをがち合わせると、それぞれ自分の喉を潤した。酸っぱさと甘さの混じったジュースの味は、灯里に爽快感を与え、アルコールを含むカクテルは、アリシアの気分をほんの少しだけ高揚させ、しよっちゅう微笑するようにさせた。

そしてアリシアは二口目のカクテルを少量、上品そうにグラスを傾けて飲んだ。彼女はたびたび飲んだが、灯里は最初の一杯だけ飲んでしまうと、それ以上は飲まず、乾いたグラスを持ってただ夜空を眺めた。

灯里はふと、アリシアが自分と離れ離れになった後海辺で何をして過ごしていたのか気になり、尋ねた。彼女は特になにもせず、一人浜辺でゆったりと過ごしていたことを教えた。

その後彼女らは雑談を始めたのだが、今ひとつ気分が盛り上がりず、よく沈黙した。灯里は微熱でもあるかのようにぼんやりとしていた。

「やっぱり眠たいのね。灯里ちゃん」とアリシアは微笑して言った。

灯里は困ったように笑い、「サーフィン、頑張りすぎちゃったみたいです」

「そう。なら今日は先に寝た方がいいわ。眠たいのに無理に起きているのは、身体に毒よ」

アリシアにそう言われても、灯里は「大丈夫です」と強がって笑顔を作り、遠慮した。「アリシアさんとまだ、こうして涼んでいたいです」

ところがその表情は陰っており、彼女の苦悩が微かに現れていた。

アリシアは首を振り、「無理しなくていいのよ」と言った。すると灯里は湿っぽい表情で、「すいません」と頭を下げた。

灯里はアリシアに付き添われて部屋に戻り、歯磨きを済ますと、ベッドに入った。

彼女は、デッキに再び行って不在のアリシアのベッドを見つめなが

ら、ボートが浜辺に着く直前の、アサトのプロポーズを受けるシーンを思い返していた。

彼は灯里に、自分と付き合ってくれかどうか明日までに考えて欲しいと願った。その願いに灯里は、意識がごっそり奪われていた。もしプロポーズがなければ、彼女は今アリシアと一緒に輝かしい星空や海辺で共に過ごした時間の感想を、美味しいドリンク片手に楽しく述べ合っているはずだった。

空っぽのベッドを見つめる彼女の気持ちは、憂鬱だった。

アサトのことを、灯里は確かに好きと思っていた。しかしそれは、一人の人間として好んでいるという意味であって、ハグやキスをする相手として好んでいるという意味ではない。痛ましい過去の記憶を持ちつつも前向きに暮しているアサトの姿勢に敬意を持ってはいるが、それは潜在的な好意ではなく、入念に吟味してみても、果然単なる敬意でしかなかった。それは相手を近しくする気持ちはなく、むしろ遠ざける気持ちだった。

「断ろう、かな……」

プロポーズに対し、灯里はそう決意しかけた。だが、踏ん切りが中々付かなかった。彼の哀愁を含む表情を、断ることでまた見なければならぬのかと思うと、切ない気分になった。

断るという選択を進んで出来ず葛藤を起こした灯里は、懊悩した。無理難題な要求をふっかけてアサトも、また優柔不断な自分も嫌悪せず、眉を顰めてひたすら悩んだ。答えを出したいけれど上手く出せない苦しみを、味わい尽くした。

彼女はベッドの上で何度も寝返りを打ち、悶々と自問自答したが、やがてリラックスしたように、静穏になった。慈しむように眠気が、彼女の悩みを頭から抜き去って、落ち着かせてやったのだった。葛藤の解決はひとまず保留となった。

灯里の眉間のしわは消え、閉じた目蓋は彼女の表情を安らかにした。

その様子を部屋に戻ってきて見たアリシアは、感慨深そうに微笑むと照明を消し、またデッキへと行った。

夜はすでに、森のかがり火が消えるほどに深まっていた。

——アリシアはほろ酔いの状態で、デッキの柵に片肘を突いて星空を見上げ、物思いに耽っていた。

灯里について、彼女が恐らくアサトからプロポーズを受けたであろうことを想像し、その複雑な心情を思いやった。

アリシアは、ある程度の事情を見通していたのだった。アサトと別れる時、ろくに挨拶も出来ず放心状態だった灯里の様子は、彼女が彼に対し気まずい感情を抱いているということ、アリシアにほのめかしていた。

アリシアは微笑し、ベッドで寝ている灯里に思いを馳せ、「明日は大変ね」と呟いた。

そして満天の星の内、ひときわ眩しく光る一等星を眺めて目に涙を溜めた。それは感情が高ぶったせいではなく、アルコールのせいだった。

流れない涙は視界をぼやけさせ、彼女にあるビジョンを見せた。

それは、灯里が自分に代わってARIAカンパニーを切り盛りしている光景だった。

プリマになった灯里は、誰からも人気があって、毎日千客万来でてんでこ舞いしている。仕事をこなすかたわら、女の子から憧れの綴られた手紙を送られたり、照れ臭そうにする男の子から冗談半分に愛を告白されたり、青年——アサトのような——から、真剣なプロポーズを受けたりしている。

しかしアリシアは、それらの好意の表現に対し、灯里が実際どのように応じるのか、皆目見当が付かなかった。それはまったく未知の、未来のことで、アリシアは、灯里が器用に言い逃れられる賢いウンディーネに成長するのか、それとも心労を厭わず、一々真摯に答える心配りの細やかなウンディーネに成長するのか、まるで分からなかった。

だが、彼女がどう成長するのかという疑問へのヒントは、明日得られそうだった。

アリシアは、灯里とアサトの関係がどのような成り行きを辿るの

か、期待した。

ただのバカンスだと思っていた島での短い期間が、まさか灯里にとって精神的に成長出来る機会になろうとは、彼女は微塵も予想していなかった。

グラスに残ったカクテルを全て飲み干してしまうと、アリシアはろうそくの火を吹き消す時のように息を吐き、「さて、わたしもそろそろ寝ようかしらね」と呟いた。彼女の目は、眠気で重くなった目蓋のせいで細まっていた。

アリシアは空になった瓶とグラスとランタンを部屋に持って帰り、片付けた。その後寝る準備に取り掛かり、すやすやと安眠している灯里の顔に癒しを見出すと、自分も安らかな眠りに入るのであった。

◇

翌日、灯里とアリシアは朝食を取ってすぐ帰れるよう荷物をまとめた後、海水浴に行くため水着に着替えた。

アリシアは、入念に鏡をチェックして髪型を調整している灯里の表情を見て、微笑を誘われた。彼女の頭の中には、やはり例の異性の姿がくつきりとあるらしい。

やがてそのチェックが終わると、アリシアは、「さあ、最後の海水浴よ。楽しみましょう、灯里ちゃん」と意気込んだ。彼女は「はひ」と答え、二人は外に出た。

今日は昨日と同じくらい快晴で、また暑かった。焼け付くような日差しを浴びてジャングルの木の葉は輝き、辺りにはむせ返るような草いきれが漂っている。

やがて二人が浜辺に着くと、鮮やかな海では昨日と同じくアサトが波乗りに興じていた。沖で、本当に海を怖がっているとは思えないほど、生き生きと彼は波を乗りこなしていた。

「アサトさん、今日も絶好調ね」とアリシア。

「はひ。やっぱり凄く上手です」と灯里。

アサトは一つの大きな波を乗り終えると、彼女らの姿を目にし、勢いよく向かってきた。

灯里は近付いてくる彼の姿を見ながら、心臓の鼓動を早めた。一体

彼に挨拶した後、何を話せばいいのかと困惑した。単刀直入に昨日要求された答えを求められても、彼女には未だ自分で納得の出来るものは思い付いていなかった。

アリシアは隣の灯里の不安げな表情を見ると、彼女の肩に手を添え、「灯里ちゃん」と笑顔で呼びかけた。彼女はアリシアの方を向いた。「今日もまた、アサトさんとサーフィンを頑張っってきたいな」「でも、アリシアさんは？」

「わたしは昨日と同じで、ゆったり過ぎすだけよ。だから、一緒にいても退屈と思うわ」

アリシアがそう言った後、二人はそばまで来たアサトと挨拶を交わした。

そして彼は灯里に顔を向けた。

彼女は何を言われるのか不安だったが、アサトは屈託のない笑顔で、「今日もサーフィンしましょう。昨日よりいい波が来てますよ」と誘うだけであった。

アサトは彼女の腕を掴むと、また昨日と同じく、微笑するアリシアに見送られて、浜辺へと移動した。

◇

灯里は、いい波というのがどんな波か分からず、アサトにその説明を求めた。すると彼は、指を水平線に向けた。海では、昨日見たものより高い波が盛んに立っている。いい波というのはすなわち、彼が乗りがいを感じられるくらい大きい波のことだった。

灯里は例のことについて一体いつ詰め寄られるのかとビクビクしていたが、アサトは彼女のためにボードを持ってきた後、準備体操を始めた。灯里は怪訝に感じ緊張しつつも、四肢をほぐした。

そして体操が終わった後、彼は、「サーフィンのノウハウは、昨日やったので覚えてますよね」と言っただけで海に入り、ボードに乗って沖まで泳いでいった。

予想と違う彼の振る舞いに、灯里は拍子抜けしてしまったが、少なくとも今は不安がる必要のないことを知ると、波の小さいところで昨日の成功の感覚を取り戻すべく、アサトに続きボードに乗って泳いで

いった。

そして二人はただ、サーフィンばかりして時間を過ごした。

波乗りを夢中になって楽しんでる灯里は、小さい波ばかりでは飽き足らず、より大きい波にも乗って、すっかり満ち足りた気分になった。

夕方近い頃になると、灯里はアサトと共に浜辺に上がり、今日で見納めとなる景色を味わった。

アサトが一向にプロポーズについて何も言わないので、灯里は彼が恐らく失念してしまったのだろうと楽観的に考えた。

ところが、アサトの言った一言で彼女はハツとし、昨日に戻った気がした。

彼は真顔で、「夕べ言ったことなんですが」と切り出したのだった。「今日また会った時にすぐに聞こうかな、と思っていたんですけどね、灯里さん、何だか表情が暗くて具合が悪そうに見えたんで、ずっと遠慮してました。でも、今のお元氣そうな灯里さんなら、はばかりなく聞けそうです」

昨日のプロポーズに対する答えを、彼は求めた。

灯里は当惑した。言うべき答えを用意しておらず焦り、サーフィンにかまけて思案を怠っていた自分は、なんてずぼらなのだろうと思いを蔑んだ。

「考えるのが難しい話だったと思います」とアサト。「もしかしたら一晩というのは、熟考するのに十分な時間じゃなかったかも知れませんか」

灯里は観念し、「すいません」と謝った。「昨日の夜、寝るまでちゃんと考えたんですけど、まだ、答えが出ないんです。わたしは、アサトさんと付き合うかどうか、決めなきゃ行けないですよね？」

彼は頷いた。

「もし、わたしが付き合うと答えたら、それでアサトさんはどうするんですか？」

「どうする、とはっ」

「わたしとアサトさんは、住んでるところが違います。わたしはネオ・

ヴェネツィアに住んでいて、アサトさんはこの島に住んでいます。仮に恋人同士になったとして、わたしたちはどうやって一緒に過ごすんですか？」

「僕は宿泊所の管理人を辞めて、ネオ・ヴェネツィアに移ります」

本気でそう考えているらしいアサトの言葉に、灯里は気迫を感じ、呆然とした。

「ネオ・ヴェネツィアに行つて、また船乗りをやり直すんです。灯里さんのしているウンディーネに、男はなれないんですよ？　だけど、その他の船乗りはなることが許されているはずです。僕はまたオールか棒を握つて、自分が乗っていたのとは違う舟の乗り方、操り方を勉強するのです。過去のトラウマを克服してね。その時は灯里さん、ぜひ手ほどきをしてください」

灯里は震えかけの声で「そんなの、無理です」、と言つた。「わたしはまだ見習いの身なんです。だから、舟の漕ぎ方を教えるなんてこと、恐れ多くとても出来ません」

「それでも僕は、構いません」

灯里は迷子になった子どものように困惑し、顔を歪め、「そもそもどうしてアサトさんは」、と言つた。「わたしなんかにつき合ってくれるかどうか聞いたんですか？」

灯里の言葉を受けて、アサトは恥を恐れず、それは彼女が好きだからだと言つた。

ストレートな告白を受けて、灯里は嬉しさを感じる反面、その大胆さを恐いと思つた。

「すいません」、とアサト。「昨日から始末の悪い気持ちに苛まれてるんです。昨夜、僕はベッドに入つても中々寝付けませんでした。灯里さんにどう答えられるのか不安で堪らなくてね。何度も寝返りを打ちましたし、目をつむつてもすぐ勝手に開きました」

灯里は、寝られなかったのは自分も同じだと思つた。

「最初は、そんな気持ちはなかったんです。初めてお会いした時は、並一通りの好印象以上のものはなかったんです。だけど昨日の夕方、海でボートを漕ぐ姿を間近に見て僕は、自分自身の姿をダブらせて、自



分もこんな風に漕げたらいいな、と思ってしまったんです。つまり、あなたに憧れたということなんですよ、灯里さん」

「そう言われた灯里は、いよいよよろたえて、どうしてアサトはここまでではつきりと自分の気持ちを主張出来るのか疑問に思った。ぐずぐず悩んでいる自分とは大違いだと感心しもした。

アサトは付き合ってくれるかどうかと、イエスカノーで答えられる形で彼女に問いかけたが、灯里は、彼がイエスの答えをせがんでいることを察していた。だからこそ、ノーと答えてその気持ちを裏切りたがっている自分も、大胆なアサトと同じで怖いと思った。

拒否することによって彼の期待や望みが無残に打ち砕かれることは必至だ。

灯里は拒否の断行が果たしてアサトにどれほどの失望をもたらすのか考え、彼の落胆する姿を予見すると、安易にノーと答えるわけには行かなかった。

が、アサトは灯里の返事をこれ以上先延ばしにしてやるつもりはないらなかった。

不意に、灯里はアサトに両肩を掴まれてビクツとした。彼のぎらついた双眸が間近く、生身の肌に触れる義肢が冷たかった。灯里はバツが悪くて、思わず目線を落とした。

「答えて欲しいです」と、アサトは言った。

耐え難い緊張感の中で灯里は、こういう場合、アリシアならどうするだろうかと考えてみた。プリマ・ウンディーネであり三大妖精の一人として称される彼女は、人気があり、よく異性に言い寄られる。その場面を灯里は、時々垣間見ていたが、アリシアは、ことごとく断っていた。相手の口説き文句を曖昧な言葉でかわして、突き付けられた好意を器用にいなしていた。

灯里は、彼女を真似てアサトのプロポーズを回避しようかと思いついたが、到底そんなことは自分には出来ないとすぐに直感した。自分はあるなりに器用じゃなく、不用意に真似すると状況を悪化させかねないと危惧した。

灯里が辛うじて出来るのは、消極的な態度を見せることだけであつ

た。

「やめてください」と彼女は俯いて言った。「わたしは、アサトさんに好かれるような人じゃないです。こんなに残るめたい思いに、苛まれてるんですから……」

アサトは否定し、「灯里さんは立派な人です」と称えた。だが灯里は、首を振って否定し返し、苦笑した。「もし立派だったら、今ちやんと、アサトさんの気持ちに答えられているはずですよ」

二人がじりじりと駆け引きしている途中、ふと轟然たる波の音が水平線より響いてきた。

アサトは灯里を見つめていた目を海の方に向けると、遠くにかなり大きな——「メートル半はある波が、緩やかに浜辺に向かって押し寄せている光景を目にした。

「分かりました」とアサトは灯里の肩から手を外して、何かを決心したらしい様子で言った。

青い空は、黄色っぽく変わりつつある。灯里とアリシアが島を去る時間が近付いていた。

「灯里さん、もし僕がああ波を乗りこなせたら」と彼は言った。「僕の気持ちに、『はい』と答えてください」

そして彼は灯里の返事を待たず、ボードと共に沖へ颯爽と向かっていった。彼女は茫然として、アサトがボードの上に腹這いになって泳いでいく姿を眺めていた。

その時、彼女を呼ぶ声がした。アリシアの声だった。アリシアは灯里を迎えに来たのだった。

「あら、アサトさんは？」と彼女は尋ねた。

灯里は「向こうです」と、すでに波の近くまで行っているアサトを指差して、彼が人の身長に近い特大の波を乗りこなそうとしていることを教えた。

二人は並び立って、アサトが難度の高い波乗りに挑む姿を眺めた。灯里は、彼が成功することも失敗することも望まず、開いた目を虚心に水平線の方に向けていた。

——アサトは、波乗りに成功する自信があった。大波をきつと乗り

こなして、プロポーズに対する灯里の肯定を得られるだろうという希望を持っていた。

ところが彼は、波の間近に迫ると、海が急に手ごわくなったような感覚がして、怯みかけた。身体にかかる水が重たくて、飛び散るしぶきがいやに冷たかった。また、吹く風はなぜか目をよくしよぼしよぼとさせた。

しかしアサトは、自分が恋を賭けて今から波乗り臨むことを再認すると、勇を鼓した。するとその脳裏に、灯里の微笑する表情や、凶暴で恐ろしいサメの口、昔の同僚の懐かしい姿が立て続けによぎった。彼はそのビジョンを雑念と思つて意気込みで掻き消すと、ボードに乗り、波との勝負を始めた。

無心で挑めば大丈夫だ、行ける、と彼は思っていた。

がしかし、アサトは敢えなく転倒してしまった。その波は、彼が経験したことがないほど強勢で、たとえ何度も波乗りしている身であっても、簡単に乗りこなせるものではなかった。大波は、彼の張り切った気持ちと淡い希望をさらっていつてしまった。

海の冷たい深みまで沈みながら、アサトは、大事な勝負に負けた不格好さに失笑を禁じ得なかった。

彼はどんな顔で浜辺に戻り、灯里に対すればいいのか分からなかった。失敗したと言つてはにかめばいいのか、シユンとすればいいのか。彼は、いつそのまま海の底まで行ってしまえばいいのに、と儂く願つた。

がとにかく、自分の求めていた恋の成就是諦めねばならなくなったのだ。それは必定だった。

手ぶらで浜辺に戻つたアサトは、灯里とアリシアに「大丈夫ですか？」、と言われて、迎えられた。彼はずっと低く俯いていて、二人がどんな表情をしているのか見えなかった。無様な自分は嘲笑されていても仕方ないと思つた。

だがアサトの目の前に、ある大きな物が差し出された。それは、波乘りに失敗した時に流された、彼のサーフボードだった。

アサトは顔を上げると、「惜しかったですね」と、笑顔の灯里に励ま

された。彼はボードを受け取ってはにかみ、「失敗した姿を二度も見られて、本当に恥ずかしいです」、と答えた。

「行けるかな、と思ったんですけどね」、とアリシア。

アサトは「また今度、リベンジしようと思います」、と言うと、暮れかけの空を見上げた。「そろそろログ・ハウスへ戻りましょう。夕方が近くなってきましたよ」

アサトがそう言うと、灯里とアリシアは頷いて、浜辺を離れた。

道中、灯里とアサトの心中には相手への複雑な思いが残っていたが、それに関してはどちらも口に出すことはなかった。

二人はアリシアを交えて他愛のない話をし、別れる前の最後の一時を楽しんだ。

◇

ログ・ハウスに戻った後、灯里とアリシアは、軽くシャワーを浴びて、汚れを洗い流した。そして着替えを済ますと、出かける前にまとめておいた荷物を持って宿泊所を後にし、帰りのボート乗り場へと向かった。

ジャングルを出、互いに思い出話に興じながら岸部の船着場に近付くと、二人はアサトの姿を見かけた。

その途端、会話は止み、灯里の表情が曇った。

アサトは彼女らに挨拶すると、「島での二日間は怎么样了?」、と問うた。

アリシアは、「とてもリラックス出来ました」、と答えた。

「そうですか」、とアサトは満面の笑顔になった。「宿泊所の管理人として嬉しく思います。灯里さんはどうでした?」

間が悪そうに佇んでいた彼女は、何か言おうとしたが、その前に口を閉じてしまった。彼女の内面には、アサトへの複雑な思いが依然として渦巻いており、容易に感想を述べる事が出来なかったのである。

がしばらくして、吹っ切れたように微笑し、「たった二日なのに」と言った。「その期間が何だか、すごく長かったような気がします。多分それは、わたしが色んな新しい出来事を経験したせいなんじゃない

かなあ、と思います。たくさんの内容が詰まった、素敵な二日間でした」

そしてアサトと目を合わせると、一緒に過ごした時の思い出を確認するように、互いに微笑み合った。

空が赤く染まっていた。帰りのボートの出発する時刻が、間近く迫っていた。

二人は別れの挨拶をし、アサトは、「また来てくださいね!」、と言って彼女らを見送った。

ボートは灯里とアリシアを乗せると、モーターの音を鳴らしだして、船着場と島を離れた。

ボートより見える島の姿はどんどん小さくなり、やがて辺りに見えるのは、夕闇で黒っぽくなっている海の広がりだけになった。

「二人とも、少し表情が少しおかしかったわね」、とアリシアは、灯里とアサトについて言った。彼女は灯里と並んで、島へ向かう時と同じように景色を眺めている。「笑顔だったけど、どこかかたい感じがあつて、まるでお見合いみたいだったわよ」

アリシアに事情を察されて、灯里は困ったように笑うと、アサトにプロポーズされたことや、最後のサーフィンで大波に乗ることが出来れば、恋人として彼と付き合う予定だったことなどを洗いざらい話した。

アリシアは、どの話に対しても平静な様子で耳を傾けた。

「もし、アサトさんがあの大きな波に乗りこなせたら」、とアリシアは言った。「灯里ちゃん本当に、彼とお付き合いするつもりだったの?」

灯里は緩やかに首を振り、それは分からないと言った。が、彼女は、もしアサトが波乗りに成功していたら、その勢いに負けて付き合うことになっていたかも知れないと思った。

「本心では、お断りするつもりでした」、と灯里は言った。「その決心は、昨日寝る時には付いていたような気がします。お断りするとは言っても、わたしはアサトさんのことを嫌いなわけじゃありません。むしろ尊敬してますし、好きだと、多分思ってます。でも今のわたしは、どんなプロポーズも断らなきやいけない立場にいるんですよ」

彼女は反省するように苦笑し、自身が一人前のウンディーネを目指していることと、早く腕を上げるために毎日ゴンドラ漕ぎの練習に精を出していることを思い出した。

日々の時間を、その目標に近付ける以外のために犠牲にすることは、少なくとも今の彼女には出来そうになかった。

アリシアは目を細め、「プロポーズであれ何であれ、断るといのは大変なことね」と言った。「それは、相手の気持ちを裏切ることになるから」

灯里は「難しいことですよね」と同感して言った。「自分も相手も納得出来る答え方が、思い付けばよかったんですけどね。わたしはぐずぐず悩むばかりで、アサトさんの気持ちにちゃんと答えて上げることが出来ませんでした」

灯里がそう言うことでアリシアはようやく、彼女の悩みの理由を十分に飲み込めた気がした。

「大丈夫よ」とアリシアは、灯里を横目で見ながら言った。「確かにアサトさんは気持ち成就させられなかったけど、何も悔やんでなんかないと思うわ。それは、灯里ちゃんが真剣に悩んだお陰よ。その心労を、彼はちゃんと理解してくれているはず」

灯里は「そうだったら嬉しいんですけど」と言っただけで苦笑した。

「自信を持ちなさいね」

そう言っただけでアリシアは、灯里の肩に手をポンと置いた。彼女が一晩中悩んでいたことを知っているアリシアは、その心労に貴い意味があるということ伝えて、励ましたかった。

その思いは通じたらしく、灯里は、アサトのプロポーズをすぐに断ろうとしなくてよかったと安堵した。そして、悩んでいた時間を、それがたとえ苦渋にまみれた時間であっても、満ち足りた気分できさか快く思い返せるようになった。

「さあ、明日からはまたお仕事ね」とアリシアはにっこりとして言った。「このバカンスで休んだ分、精一杯働きましょう」

灯里は、「はひー!」、と元気に答えた。

大きな夕陽が、水平線の上に乗っていた。

小島を発ったボートは、航跡の白い泡を途切れ途切れに描きながら、ネオ・ヴェネツィアに戻るべく、海上を走っていった。

(完)

## 【4】恋をしたら【New!!】

\*\*\*

今日はやけに、髪にさわる。

彼女は、それでももう何度目か分からないくらい、繰り返して来た憂鬱そうなため息を、ふたたび繰り返す。そして、自分の好みで分けた前髪を、撫でるようにして、入念な手付きで、あんばいよく整える。

「今日は何だか、藍華ちゃん、しんみりしてるね」

「え、そう!？」

ぎよつとした様子でそう言い、海の方に向けていた顔を、わたしの方に回す。どうやら凶星らしい。

わたしと藍華ちゃんは、海を望む高台に来ていた。前には落下事故を防ぐための鉄の手摺りがある。時おり吹く風と、惑星<sup>アケア</sup>のかすかな震動に揺れる、夜の闇をほんのりと帯びた、夕暮れの海は、日に照らされて、今もなお、優しい光を表面にたたえている。

「何かあったの?」

そう尋ねると、彼女は海に向き直って、撫でている途中の前髪をおさえて、「ううん」と洗面でうなり、「別に」、とだけ、みじかく、素っ気なく答えた。そしてその洗面は、だんだんと苦笑に変わっていき、最後に彼女は、「うん」と、口角を少しだけ上げて、まるで自分に言い聞かせるように、うなずいた。

「何にもないよ」

「うそお?」

「うそじゃなあい」

それは、いかにもわざと取りつくろったような、いつわりと、疑惑の調子だった。

わたしは、ぜんぜん納得ができなかった。ぜったいに藍華ちゃんには、何かある出来事——少し熱っぽい表情を見るに、それはたぶん、よい出来事だろうと思う——を経験したに違いない。そのことは、強



く、自信を持って、確信ができた。

わたしは、いぶかしく思うような表情で、「やっぱりうそだよ」と、実際にそうは口にせず、眼力で問いただすつもりで、もっぱら、彼女を見つめることに徹する。すると彼女は、間が悪そうに、目を下に伏せた。実情を隠し通すことは、彼女にとつて、不得手なようだった。つまり、何があつたのかを、明かしたのである。

「たいしたことじゃないの。ただ、すてきなあつて思う人と、目が合っただけよ。ゴンドラ漕いでる時に」

「へえ」

「ね？ わざわざ言うようなことじゃなかったでしょ？」

そう言うと彼女は、うそだとすぐ分かる不機嫌をよそおって、くちびるを忌まわしげに結び、恥ずかしそうな様子で、前より倍くらい速い手付きで、落ち着きなく前髪を撫で始める。

緊張する必要などないのに、わたしに尋問でもされているかのように、態度がいやにかたくなっている。だから、少しだけ、前髪が乱れる。

わたしは首を振って否定し、「お陰で納得できたよ」と答える。

「納得……何に？」

「今の藍華ちゃん、何だかシユンとしちゃって、いつもより色っぽいんだもん」

「でもね——」

彼女が言いかけて、前髪をさわる手を、手摺りに下ろし、海を、もの静かな——何も見つめていないと思えるくらい、静かな眼差しで、虚心に眺め出す。

横から吹いてくるそよ風が、彼女の名前と同じ色の髪を、やわらかに揺らす。今まで彼女の自然な振る舞いを封じていた緊張は、和らいだように見える。

「すれ違った時は、あたしの胸がときめくだけで、他はなんにも起こらなかつたんだ。おたがいに、たんに通り過ぎていくだけだった——そう、おたがいに本当に赤の他人同士で、何の縁もなく、ぜんぜん関わる意味がないかのように。けど、あの人と目が合った時、あたしの心

には、何か、心地いい麻酔のようなものが、ぐさつと、深く打ち込まれたような、そんな不思議な気持ちがあったのよね」

「もしかしたら」、とわたしは、憂いに沈んだような顔の彼女に、言いかける。「そのすてきな男の人の方も、藍華ちゃんに、同じように、胸をときめかせてくれたかも知れないよ?」

「そうは思えないなあ」、と彼女は諦めた様子で、独り言めかして答える。「あたし、がさつな性質だし、目が合った時、どうせどぎまぎして、見苦しく取り乱してたと思う。おしとやかに——もしもできるなら、アリシアさんのように、しつとりと、余裕たっぷり、振る舞えたらよかったんだけどね」

そう言っただけで彼女は、困ったように眉を下げ、いくぶん哀れっぽく、はにかんだ。

わたしはその顔を見て、胸がきゅんと痛むように感じた。

ぐうぜん通りすがりの男の人と目が合っただけなのに、藍華ちゃんは、わたしが同じ経験をした場合に、恐らくそうするだろうと予想されるよりも、はるかに深刻に、痛切に、心を痛めているようだった。

きつと、その思いがけない出会いが、彼女にとっては、千載一遇の、恋のチャンスだったのだと思う。男の人の、一生忘れられないような面立ちが、その出会いの瞬間に、深く、記憶に焼き付けられたのだと思う。そうに違いない。でなければ、こんなに落ち込まないだろう。もしもそのチャンスを無に帰せず活かしていれば、彼女は新しい異性の知り合いを得、彼との交流を重ね、次第に仲良くなり、しまいには睦まじく結ばれたのかも知れない。だとすれば、後悔するのは、やむを得ないことである。

藍華ちゃんは今、海を見ると同時に、ビジョンを見ている。得られははずの、幸福な、恐らく人が人生で味わえる内で最高に近い、かなりのていど幸福な、失われた時間をお蔵入りになったフィルムとして、半ば優しい気持ちで、半ば虚しい気持ちで、眺めている。そしていつまでも飽かずに、前髪を、他のからだの部分と、心と同じく、悲しみに打ちひしがれた手で、ほとんどつねに触れているのは、ひよっ

とすると起こり得る、そのチャンスの再来に、備えているためなのだ。藍華ちゃんは、取り逃した幸福を、今度は逃がすまいとして、意気込んでいる。

「ただそのチャンスは、もうきつと来ないんだ。わたしの直感がそう告げている。」

「多分、藍華ちゃんも、同じように感じているのだろう。だからこんな、ひとけのない、海を眺めるためだけに存在するような場所で、わたしの、たいした目的のない、率直に言ってくだらない、のんびりとした時間に、付き合ってくれているのだ。」

「わたしは、やるせない思い——それは間違いなく、藍華ちゃんへのシンパシーだった——を感じて、その清潔な白いセーラー服に包まれた身体に、そつと、向かって行った。藍華ちゃんは、びっくりした。」

「ちよつと、灯里？」

「わたしは、悲しみのとりこになっているともだちに、恋人のつもりで、抱き付いたのだった。」

「彼女が恋した男の人には、ぜつたい、とうてい、じぶんの魅力は及ばないけど、彼と同一人物のつもりで、失意の彼女のなぐさめになれると信じて、その胴体を包み、いつくしんだ。」

「どうしたのよ、急に？」

「藍華ちゃんの気持ちを考えて、こうせずにはいられないよ」

「あたしの、気持ち？」

「彼女は平静を失って、どぎまぎしている。その様子は、恐らく彼女がひとめ見て気に入った男の人と、すれ違って、目を合わせた時と同じだろう。」

「藍華ちゃんの身体は、不思議なかおりがした。それはもしかすると、かおりじゃなくて、何かゆうぜんと立ち上がる、気配のようなものだったような気もする。すごくいいかおりだった。香水なんかじゃ決して起こせない、彼女特有——きつと、そうだと思う——の、少し強情で、そのために時々損をしてしまうというような、そんなぶきつちよな感じのする、かぐわしい、愛おしいかおりだった。」

「そうね」と彼女は静かに答える。「わたしは、正直、少し寂しいって、

感じてる」

そして、藍華ちゃんは、わたしの思いやりと、好意——しかしそれは、赤い糸に結ばれた異性のカップルが持ち合うような、性的なものではなくて、平たく言えば、友情である——に答えて、わたしをいき返してくれた。

ともだち同士で、恋人ごっこのような真似をして、わたしと藍華ちゃんは、たわむれたのだった。

やがて抱擁が解けると、彼女は照れた様子で、ぷいっと何事もなかったように振り返り、ネオ・ヴェネツィアの街へと降りる高台の階段を、ひとり下りていきだした。

「さあ、早く帰って寝て、明日からはまたゴンドラ漕ぎとガイドの練習よ！」

声高に言つて、彼女の影は、徐々に黒さを増しながら、下の方へと、遠のいていく。

わたしは、早く付いてきてよと無言で主張し、また求める、愛着のある背中に、口元だけで微笑みかけ、少し遅れて、その後を目指す。

やがて追い付き、並んで歩く。

夕日は沈み、夜空に、無数の星が、群れをなして浮かび上がる。

その中にわたしは、友情か愛情、あるいは信頼などをほのめかず、微かな、それでいてめざましい光が、ひとつぶだけ輝いているのを、くつきりと見出した。

そしてしみじみと、何かとうとくて新しいような感情が、その光によつて、心の中にあたたかく照らしだされるのを、おおきな喜びとともに、感じるのだった。

(完)

## アリス編

【5】その、雨上がりの夕焼けは……

\*\*\*

小さな円が、通りを次々と通っていく。

黒い円、水色の円、花柄の円……色々あるそれは、全て水の粒を弾いていた。

すなわち、円は傘だった。

水の都ネオ・ヴェネツィアの今日は、雨降り。

アリスは自身がウンディーネの修業をしている会社“オレンジ・ぷらねっと”上階の物見で、一人雨に濡れた街の景色をぼんやり眺めていた。

引きも切らず雨粒を落とす灰色の空の下では、晴れている時よりも少ない数の人々が、傘を差して歩いている。晴れている時にはよく見える彼らの様子——どんな顔をしている、どんな服を着ている、どんな髪型をしているなどのことは、その傘のために今日は少しも分からなかった。

ここ最近、ネオ・ヴェネツィアでは陰気臭い日々が続いている。

雨下ではゴンドラを漕ぐというウンディーネの修行が出来ないので、そんな時アリスは代わりに、部屋で仕方なくスクールの勉強をしたり、本を読んだりする。

今日はスクールで課された宿題を済ませた後、復習と予習をした。しかししばらく続けた後、ひどい退屈を感じだし、全身がむずむずした。そのために彼女は気晴らしがしたいと思い立ち、今物見へ外を眺めに来ているのだった。

だが、物見に来たところで特に楽しいということはなかった。

アリスは相変わらず退屈そうに、ハア、とため息を吐いた。

雨は一向に降り止む気配を見せない。

アリスは無性にゴンドラ漕ぎの練習がしたいと思い苛立っていた。

ゴンドラ漕ぎは、ウンディーネの見習いという身分である彼女にとって、日課であり、日々の生活から欠けるべきでないことだった。

日課とは言え、アリスはゴンドラ漕ぎを強いられて渋々するのではなく、主体的に、熱心な態度で毎回取り組んでいた。

天才と称される彼女は、技術に関して言えば同僚は元より、幾らかの先輩すら凌ぐため特に改善の余地がなかったが、内面に関してはそれがあつた。すなわちアリスは、少々独りよがりで他人と打ち解けにくいという性分を持っているのである。その性分は、ゴンドラの乗客に観光案内する職業の者としては、やはり欠点となる。

しかしその欠点は、他社の先輩である水無灯里や藍華と打ち解け仲良くし、合同練習等で交流を重ねていくことで徐々に快方へと向かっていた。彼女らと接することを続けければ、アリスはいずれ自分が、それが通常であるところの不愛想な表情を、人懐っこい表情に変えられる気がした。

先輩との合同練習には、雨によるキャンセルのため何日かのプランクが出来てしまっている。アリスは久しぶりに彼女らと一緒に練習したいと思つた。だがしかし、天気が悪くてはそれは叶わない。

満たされない望みは、彼女の苛立ちを一層募らせた。

◇

「何か出来ることはないんですかね？」

部屋に戻つたアリスは、同居人であつ先輩でもあるアテナに相変わらずの様子で問うた。ゴンドラ漕ぎでも勉強でもない有意義な過ごし方を、彼女は切に求めていた。

アテナはベッドの上で上半身を起こして、読書している。彼女は本から顔を上げ後輩に眠たそうな目を向けると、窓の外の雨模様をじつと見つめた。そして苦笑し、「そうねえ」と答えた。「こんなに雨の日が続くと、じつと休む以外どうしようもないわね」

諦念に満ちた答えを聞いて、アリスは慚然とした。

——雨が降り出した日、アリスたちは、雨で波紋の絶えない水路のゴンドラを陸揚げした。メンテナンスするためである。そして格納庫に移し、目に見える汚れや、付着した貝を取り除くなどして、外面

を綺麗にした。その作業に従事することで、その日一日は潰れた。

次の日も雨だった。アリスたちは憂鬱な気持ちで、再び格納庫に向い、更なるメンテナンスを加えることになった。すなわち、何艘かのゴンドラは所々湿気ていたので、腐朽を遅らせるよう、防水用のコートを施すことにしたのである。そのついでに汚れたオールを磨きもした。

三日目も雨だった。アリスたちは少々うんざりして、色があせているゴンドラにワックスを塗った。するとゴンドラは漆塗りのようなぴかぴかとした光沢が出て、見違えるように輝いた。

それでゴンドラのメンテナンスは終わった。何艘かの老朽がひどいゴンドラは、専門の業者に改修を委託した。

補修したゴンドラを見て、アリスの練習したいという希望はいやまに募った。自分の真つ新まっさらのように黒光りするゴンドラを、灯里と藍華に早く見せて自慢したいと思った。

しかし四日目も雨だった。それはつまり今日である。アテナとアリスは朝方部屋の掃除に取り掛かったが、昼頃にはすでに終わってしまった。

結局アリスは机に向い、教材とノートを広げ、再び勉強することにした。教科書を読んで知識を復習し、問題集で実際にそれが身に付いているかどうか確かめた。その後には、予習もした。

一つだけに限らず色々な教科の勉強をしている内、いつの間にかアリスは、ノートの隅に無意識の内に落書きするようになっていた。悶々とした気分で描いたそれは、まるで自分の苛々する心中を映し出したかのような、絵とは言いがたいもやもやした何かだった。

アリスは振り返ってアテナを見た。

彼女は相変わらず開いた本を見つめ、読書に没頭している。

机の方に向き直ってアリスは、フウ、と息を吐いた。そして首を傾け、湿っぽい表情で視界をぼやけさせた。勉強に打ち込むことに単調さを感じ、嫌気が差した。

余りの退屈さに、アリスは目蓋が重くなり、ウトウトし始めた。

彼女は見切りを付け、身が入らない勉強を止めにした。そして机の

上の物を全部浚さらえて突つ伏した。

寸時も途絶えず聞こえる、しとしとという雨音……

腕の中で首をゆっくりと回転させ、窓に視線を遣ると、雨天の鈍い光を反射して落ちる雨粒を見た。アリスは、そこはかたなく雨雲に恨めしい気持ちを抱いた。

しばらくすると、アリスは目を瞑り、深い呼吸を繰り返すようになっていた。

眠りに、落ちたのだった。

◇

目を覚ました後、アリスはとある水路の栈橋に、他社の先輩である灯里と藍華と共にいた。

そばには三艘のゴンドラが浮かんでいる。彼女らはゴンドラ漕ぎの合同練習のために集まった。

雨は止んでいる。がしかし、空はどんよりと暗く曇っている。

「また降りそうだね」と灯里が曇り空を見上げ、言った。

藍華は頷いた後、低いところに垂れ込めている雲を見つめ、「そうですね」と答えた。「この分だと、たっぷり練習するのは無理っばいわね」

憂鬱そうな二人は、悪天候のぶり返しを予想して傘を持ってきていた。

アリスは冷たい目付きで彼女らの用意したその雨具をむかむかした様子で見つめた。

彼女は傘を、持ってきていなかった。

雨が止み、何日かぶりに練習が出来るようになったので、彼女はやる気に満ち満ちていて、意気軒昂だった。

ようやく練習が出来るのだ、これ以上雨に降られてたまるものかという気持ちで社を出たせい、念のために傘を持っていくという考えは彼女の頭になかった。

藍華は片目だけやや大きく見開いて、いぶかしく思うような表情で、もし雨が降ったらどうするのかとアリスに尋ねた。

アリスは雨が降るといふことは考慮から外しているので、「大丈夫でしょう」と答えた。彼女の内面に満ちているやる気は、悪天候への



恐れをすっかりなくしていた。

アリスの自信満々な返答を聞くと、藍華はどこか白けた感じの態度で納得し、灯里は呆れたようにぼかんとした。

曇天の下、雨が降るだろうと予想している二人と、まるでしていない一人は、それぞれ自分のゴンドラに乗り込んで水路に進みだし、練習を始めた。

今度の練習は天気が悪いせいか、三人のウンディーネを包む雰囲気  
が普段とは異なり、中々盛り上がりせず、皆沈黙しがちだった。

しばらくすると、灯里と藍華が思ったより微弱ではあったが、再び雨が降りだした。

三人はゴンドラをひとまず停止させ、今後について相談しだした。

「やっぱり降ってきたね」と灯里。「これからどうしようか？」

「そうねえ」と藍華。「取りあえず、しばらく止むのを待つことにしよう？」

二人はゴンドラの上で雨をやり過ぎすことにし、持ってきた傘を差した。

まだ成果を得られず物足りないアリスは、藍華の取り決めを不服に思い、「わたしは続けます」と言った。

灯里は「風邪引いちゃうよ」と言い、近くの棧橋で降りて雨宿りするように勧めた。しかしアリスは首を振って拒否した。灯里は困ったように眉を下げた。

藍華は呆れたようにため息を吐き、「後輩ちゃん」と呼びかけた。

「やる気一杯なのはいいけどさ、晴れるまで我慢しなよ。雨が降っちゃ、ゴンドラ漕ぎなんか出来ないでしょ？」

藍華の諭すような言葉でアリスは、自分の意気込みに水を差されたように感じ、いよいよ不服に思いました。

彼女は平然と「出来ますよ」と嘯うそぶいた。「先輩方は持ってきた傘を差して、せいぜいパラパラという雨音でも楽しんでいてください」

後輩の嘲弄するような言葉に藍華は佛然とし、彼女を鋭い目付きで睨み付けた。

アリスは怯まずに彼女を同じような目付きで睨み返すと、プイと

そっぽを向いてオールを構えた。

彼女は先輩たちの方へ向き直り、「それじゃ、わたしは行きますので」と無感情に言うと、ゴンドラを漕ぎだし、二人のもとを去った。

◇

降り出した雨は、徐々に勢いを増してゆき、やがて辺りは白く煙りだした。

アリスは長い髪や制服からたくさん水を滴らせながら、孤独に練習を続けていた。悪天候の下、彼女は寒気がし、雨を吸った制服を重たく感じた。

何となく、身体がだるかった。寒くて手足が凍えるし、視界が悪くて自分がどの辺にいるのかピンと来ない。

孤軍奮闘していたアリスだが、状況の不利にとうとう練習の中断を決意し、近くの橋の下にゴンドラを漕ぎ入れると、そこで雨宿りすることに決めた。

橋の下はトンネルのように暗く、外では空より落ちてくる雨粒が、無数の波紋を水面に繰り返して描いている。

雨音としぶきに閉ざされたその陰気な場所は、アリスに孤独を感じさせ、物思いに耽らせた。

アリスは、何となく惨めな気持ちだった。いやに冷静な様子の藍華に反抗して、一人強情を張ってゴンドラを漕いできた割に、結局少しの成果も感じられなかった。また、灯里の進言を無視した挙句寒い思いをする羽目になった自分が、愚かだと思った。

どうしてあんな意固地な真似をしたのだろうか、彼女は考えた。そして練習へのやる気において、先輩との間に隔たりのあることを知って悔しく感じたことを思い出した。

長く降り続いた雨がようやく上がって練習に向かう途中、アリスはつつきり、灯里も藍華も、自分と同じく久しぶりの練習に意気込んで来るに違いないと、確信に近い強さで信じていた。それなのに二人は用心深く、天気急変などに配慮して、練習の中断は十分有りうると思う様子で、傘を用意してきていた。

アリスは傘を持つ二人の姿を目にした時、彼女らが練習に対し余り

情熱を持っておらず、どことなく面倒臭がるように消極的で、もしも雨が降り出だせば容易に中断するに違いないと悟って軽蔑を抱いた。

灯里に雨宿りした方がいいと勧められた時、アリスは一人だけ傘を持っていない自分だけよそに行くなんて絶対に嫌だと思っただし、藍華の我慢しろという小馬鹿にしたような注意には、猛烈な反発を感じた。

しかし先輩への軽蔑は、今は心が狭い自分に対するものによって変わった。びしょ濡れになってしまったアリスは、灯里の進言を素直に聞いておいた方がよかったと後悔し、藍華の注意に関しては、確かに彼女の言う通りで、長く満たせなかつた鬱憤の解消の優先に、躍起になり過ぎていたと反省した。今回の天候が練習するにおいて成果の得られるコンデイションでないことは、冷静に考えればすぐに察せられることだった。

アリスは、灯里と藍華は恐らくもう練習に切りを付け、棧橋でゴンドラを降りて、雨を凌げる近くのお店かカフェにでも行っているだろうと推測した。そして、彼女らがくつろいでいるだろう温かく明るい環境を想像し、寒く暗い場所に一人差し置かれた自分の境遇と対比して、ひどく寂しい気持ちに苛まれた。彼女を慰めてくれるのは、膝を抱く自分の両腕の頼りない温もりだけだった。

アリスはやがて眠気を催して、うつらうつらとしだした。

憂鬱、寒さ、間の悪い気持ち——全て忘れてしまいたいと切に願っている惨めな彼女は、その身を眠気に委ね、座った状態のまま寝入った。

◇  
やがて起きると、雨雲はすでに去ったらしく、空には青の天井がまねく表れて澄んでいた。

彼女は寒さに硬くなった身体を起こして、周りを見回した。すると、自分が世にも奇妙な場所にいることを知り、驚愕した。寝ている間にゴンドラが水に流されたのか、どこか不案内なエリアまで移動したらしい。

そこは、水が満ちているだけの空間だった。周囲には視界を遮る建

物が一つとしてなく、あらゆる方面に水平線が見える。

アリスの周りの水面では、アメンボが滑ったり、カメが首を出して泳いだりしている。

「どこだろう？　ハッ」

アリスは呟いた。すると近くを滑るアメンボが返事した。

「波紋の下をよく見るといいよ」

そしてアメンボはアリスの乗るゴンドラよりどんどん遠ざかっていった。

一体何があるのかと、彼女は不思議な気持ちで、アメンボの描いていく波紋の下を見つめていた。水の中では無数の魚が、鱗を日の光に輝かせながら泳いでいる。

アリスはハツとした。ゆらゆら揺れる水の下に、見覚えのある何か沈んでいることに気が付いたのである。

彼女は目を凝らして見て、それが果たして何なのか調べようとした。

その何かは、上が鋭く尖っていて、堂々と屹立するようになり、ネオ・ヴェネツィアの鐘楼のように見える。そして鐘楼より下には、同じように見覚えのある、ネオ・ヴェネツィアによく似た街並みが、水に光を遮られて、目の届きにくい暗がりの中に広がっている。

すなわち水中のそれは、アリスの故郷の街だったのである。

沈没したネオ・ヴェネツィアは彼女を大いに動揺させ、混乱させた。「降り終わったんだよ」と誰かが言った。近くに小舟があり、それに毛の長い肥満体の、頭に小さな王冠の載った猫が乗っている。どうやらその猫が言ったらしい。「全部の雨がね」

アリスは愕然とした。猫に詳しく話を聞くと、もう二度とアクアに雨は降らず、永久に晴れの天気が続くそうだった。

「みんなは……ネオ・ヴェネツィアのみんなは、どうしたんですか？　どこへ避難したんですか？」

「さあねえ？　知らないよ。まあ少なくとも、こんな退屈な世界とは違うところへ行ったことは、間違いないねえ」

そう猫が言うと、アリスの乗るゴンドラが揺れ動き、大きな波紋が

辺りに広がった。

「しかし君は何で残ったのかね。みんなと共に行きやいいのに。物好きなんだね？」

猫の言葉は最早アリスの耳に入らず、彼女は蒼白な顔で呆然とした。猫は興奮めし、自動で動くらしい小舟で去っていった。

アリスは少し辺りを調べてみようと思ひ、起ち上がってオールを水に差すと、ゴンドラを漕ぎだし、四方八方を隈なく調べ回った。

がしかし、どこへ行っても水だった。世界は何もかも、雨に飲み込まれてしまったのだった。

オールを持って水平線の先へ越えてみても、彼方に別の水平線があるだけで、他には何もなかった。

水に映る太陽が、眩しく照っている。何も楽しいことなんてないはずなのに、太陽はまるで笑っているかののように、輝いている。

アリスはどうしていいのかわからなくなって、へたり込んだ。考える気力は出なかった。考えることが多すぎるのだ。故郷が浸かっている水上の世界、自分だけが残された理由、ネオ・ヴェネツィアの人々——灯里や藍華の行方。

「どうして?」、と尋ねたいことは枚挙に暇がなかった。

絶望に気が遠くなりだした頃、どこからか透き通った声が響いてきた。

……ちゃん?」

聞き覚えのある、慕わしい声だった。

……アリスちゃん?」

◇

目が覚めると、アリスは机の上だった。

彼女は、自分を覗き込むような褐色の肌の顔と、薄紫の短い髪を見た。

呼びかけたのは、アテナだった。

「大丈夫?」

彼女は、怯えるように目を剥いて呼吸の荒いアリスに、心配するように尋ねた。すると彼女は机上に寝ている上半身を勢いよく起こし、

目を何度もしばたかせた。

「いつの間にか、寝ちゃってました」とアリス。彼女は苦痛な夢から目覚められたと知り、安堵した。

「雨、上がったわよ」

アテナに教えられ、アリスは窓の方を見てみた。すると彼女の言う通り、外では雨が降っておらず、雲間に爽やかな青空が覗いている。

アテナは散歩に行こうとアリスを誘った。

彼女は気晴らしがしたかったので、その誘いに二つ返事で乗ると、冷や汗をタオルで拭い、やや乱れた髪を直した。

そして二人は部屋を出、足任せに漫然とネオ・ヴェネツィアを巡り始めた。

雨に温もりを奪われた街は少し肌寒かったので、アテナはアリスに、近くのカフェに寄って温かい飲み物を飲まないかと尋ねた。アリスは頷いた。

やがて入店した二人は円いテーブルに着き、シナモンの香りがするカプチーノを飲んで温まった。そしてホッと一息吐き、甘くて美味しいという感想を述べ合った。

その後アリスはアテナに、自分の見た夢の話をした。灯里と藍華に強情に反発し、仲が悪くなってしまったことや、橋の下で孤独と寒さに震えたこと、ネオ・ヴェネツィアが水没したヘンテコな世界に転移したことなどを、彼女に教えた。

夢について話す彼女の口振りは、現実を目覚めたゆえに気楽だったが、反面そのビジョンが明瞭に蘇ってくるように思えて、気重だった。「そんな夢を見てたんだ」とアテナ。「道理で、呼吸が荒かったわね」

アリスはため息を吐き、「でっかい嫌な夢でした」と嘆くと、沈んだ表情で手元のカップを取り、中身に口を付けた。

アテナの目に、彼女は寂しげな様子に見えた。彼女は眼差しが陰っており、背が丸く、少しやつれている。

アリスは、テーブルにカップを置くと、アテナに向かい、先輩たちに悪いことをしたと反省するように言った。

灯里と藍華と疎遠になったのは夢でのことなのに、彼女らの見せた表情——灯里のおずおずと俯いた顔や、藍華の責めるような刺々しい眼差し——が鮮明に思い返されるせいで、アリスの心は後悔の念にずきずきと疼いた。

アテナは彼女に微笑みかけ、「大丈夫よ」と慰めた。「夢で仲違いしても、現実で仲直りすればいいじゃない？」

しかしアリスは「憂鬱です」と顔を俯けて言った。「先輩たちと、顔を合わせるのが」

アリスは、自分が余りにも夢の影響を受けすぎていることを熟知していた。夢で起きた不幸について深刻に悩むのは、至極馬鹿げたことだと分かっていた。だが、思慮を欠いたみずからの不遜な態度、灯里と藍華の冷淡でよそよそしい表情、味わった孤独の心細くするような辛さは、彼女の記憶にくつきりと焼き付いていて、消え失せる気配を少しも見せなかった。

不幸な夢による今の憂鬱は、アリスにとって、解消したいと強く望むものであった。気が進まなくても、アリスは彼女らに会いたかった。

ふと、アテナが「あつ」と発した。

彼女はにこやかな表情でアリスに呼びかけ、窓を見るよう促した。

二人が揃って窓を見ると、アリスはハツとし、猫のような背をピンと真っ直ぐに伸ばした。

窓の外に、灯里と藍華がおり、店内を覗いているのである。

灯里と藍華はアリスたちに軽く手を振ると、入店した。彼女らはアテナに挨拶し、アリスに久しぶりと声を掛けると、外の肌寒いことを互いに確認し合った。彼女らも雨上がりの街を散歩している途中で、同じカフェに立ち寄ろうと考えたようだった。

アテナたちは、二人のスペースを開けるため、互いに身を寄せ合った。彼女らと向い合わせで座った灯里たちは、同じ飲み物を頼み淹れてもらおうと、その温かい甘みを快さそうに味わった。

彼女らが来ることで、アリスはいささかバツの悪い気持ちになった。夢でのいざこざが思い返されたのである。

藍華は彼女の俯きがちな目を覗き込み、「どしたの？ 後輩ちゃん」と尋ねた。「何だか顔が暗いけど」

灯里はきよとんとした表情で、アリスを見つめている。

アテナは、灯里と藍華の何も知らない様子と、彼女らへの応じ方に気を揉んでいる後輩とを見比べ、微笑した。そして、アリスが灯里たちの出てくる夢を見たことを教えた。

「へえ、そうなの？」、と藍華。

「どんな夢だったんだろう？」、と灯里。

二人は興味深そうに笑顔を見合わせた後、どんな夢を見たのか教えてくれるよう、本人に迫り頼んだ。

アリスは首を振って「大した夢じゃないです」、と答えた。

その後も彼女はしつこく尋問を受けたが、絶対に口を割らなかった。

埒が明かないと思った藍華は、「何よ。勿体ぶっちゃって」、と不満そうに言った。

腕を組んで目を瞑る藍華の呆れた様子を、アリスは上目遣いで遠慮がちに窺っている。

彼女の眉間の皺を見ると、そこはかたなく夢での藍華がその刺々しい雰囲気纏って蘇ってきた。

アリスは、彼女が冷淡でないことを確かめるため、恐る恐る「合同練習」、と呟いた。藍華は目を開いて彼女を見、きよとんとした。「また、参加してもいいですか？」

「え？」

藍華はよく聞き取れず首を傾げ、再度言ってくれるよう頼んだ。

アリスは拒否の答えを受けることに怯え、口が重かったが、どうか勇気を振り絞って、さつきよりも大きい声で、合同練習に参加してもいいかどうか尋ねた。

質問が何か知った藍華は失笑し、「何でそんなこと聞くの？」、と嘲るように言った。「今更参加していいも悪いもないでしょ？ しよっちゆう一緒に練習してるんだし」

アリスを見つめていた灯里は眉を下げ、心配するような顔で「どう



したの?」、と彼女に尋ねた。「何だか今日のアリスちゃん、らしくないね」

アリスは苦笑して、「すみません」と謝った。「わたしが練習に参加すると、先輩方に迷惑をかけるかも知れないって、ふと考えちゃったんです」

それきり彼女は深く俯いて、黙りこくってしまった。

灯里と藍華はその様子をしばらくじっと見つめると、互いに顔を見合わせ、苦笑した。二人とも、アリスが自信をなくすような夢を見たに違いないと、確信したようだった。

藍華は頬を緩め、「馬っ鹿ねえ」と言うと、テーブルに片肘を突き、手で頬を持った。アリスは顔を上げ、その金色の瞳を見つめた。

「あたしがあんたに迷惑を感じてるんなら、とつくの昔に付き合うのを止めてるって」

「わたしとの練習は、迷惑じゃない、ですか?」

藍華は朗らかに笑うと、「あつたり前よ」と率直に答えた。「迷惑するどころか、むしろ感謝してくらいよ……ね? 灯里」

藍華の目配せを受けた彼女は、「うん」と頷いた。「アリスちゃんと一緒に練習するの、わたし好きだな。ゴンドラ漕ぐの上手だし、色々参考になるもん」

「灯里先輩……」

アリスは自分を見つめる灯里の清々しい笑顔を見て、瞬時に涙が込み上げてきた。

「よきライバルだと思ってるわよ」と藍華。「灯里に対してもそうだし、もちろん後輩ちゃんに対しても、同じくね」

「一緒に練習すると、みんなで成長を共感し合えるもんね」

藍華は「ええ」と頷いた。「少し生意気なのが鼻につくけど、後輩ちゃんのそののないオール捌きには一目置いてんのよ。何でそのあたしが、あんたとの合同練習を拒否する理由があるの?」

「ライバルは、お互いに高め合ってこそライバルだよ」

藍華は「うん」と答え、アリスをにっこりして見つめた。「だから、余計な心配するの禁止。いいわね? 後輩ちゃん」

アリスは再び俯き、腿の上に置く両手で制服をギュツと握り締めた。

彼女は、先輩たちの友情に対する感謝の念の横溢を抑えきれなかった。目元が涙でじんわりと温かくなりだしたアリスは、その感情の奔流が止んで落ち着くのを待つだけで、今は手一杯だった。感情が内面より流れ出ていく時、その中には憂鬱が混ざっていた。

アリスは哀れっぽい自分の様子を気恥ずかしいと思いつつ、灯里たちのくれた励ましの言葉を、快く噛みしめていた。

彼女を除く灯里と藍華とアテナは、アリスの繊細な様子を見守ると、互いに目配せし、微笑み合った。

灯里は「アリスちゃん」と呼びかけると立ち上がり、彼女に近付いていつて制服を握り締めているその腕を優しく掴んだ。

アリスは未だ涙目をしていて笑むことが出来ず、自信がないので、俯けた顔を上げられなかった。

「藍華ちゃんが、久々に合同練習しに行こうだって」

藍華はすでに席より立ち上がっていた。彼女と灯里はアテナに対し、練習に行つてきますと言うと、アリスを引き連れてテーブルを離れていった。アテナは三人に微笑みかけ、「頑張つてらっしゃいね」と励まして見送った。

◇

涙で目元の赤いアリスは、灯里たちと一緒に水路に向い、練習を始めたものの、彼女らの間に中々溶け込みにくかった。

が、先輩たちの心配りのお陰で、彼女は徐々に本調子を回復し、やがて屈託なく笑えるようになった。その頃には涙は乾いており、目元の赤みは引いていた。

三人の見習いウンディーネたちのする合同練習は、雨のせいでもより時間が短かったが、すこぶる充実したものとなった。彼女らは雨で出来なかった分を挽回するように、精を出してゴンドラを漕いだ。

練習を終わりにし、水路から引き上げる時、三人は、海の果てに真っ赤に燃える夕焼けを眺めた。

「雨、止んでよかったですね」とアリス。彼女は心底そう感じた。

「本当だねえ」と灯里。

「やっぱり、ブランクのせいで腕が鈍ってたわね」と藍華。

「明日も、また頑張って練習しましうね」

アリスの誘いかけに、他の二人は頷いて答えた。

三人は朗らかに笑い合い、再び夕焼けを見つめた。

アリスにとって今二人と共に過ごしている時間は、昼間見た夢などとは違い、寂しさや寒さとは無縁の、気持ちが自然と和らぐような非常に愛おしい時間だった。

彼女らの背後で鐘楼の晩鐘が、ゴオンと厳かに鳴った。その音は街中に響き渡り、夕べになったことを知らせた。鐘の音を聞いた人々は、今日一日平和に暮らせたことに感謝を捧げ、天に祈り、互いに微笑み交わすと、「さようなら、また明日ね」と言い合って別れた。

ネオ・ヴェネツィアは水の中に沈んでなんかおらず、日に明るく照らされて、生きている。

手でひさしを作って夕焼けを眺めながら、アリスは、すぐ近くにある幸福感を、溢れるような感謝の念でひしと胸に抱きしめ、包み込んだ。

長い陰鬱な雨の日々は、ようやく明けた。

明るく照る雨上がりの夕日は、翌日の夕べも同じくネオ・ヴェネツィアの空に浮かび、ゴンドラ漕ぎの練習に励んだ三人のウンディーネ達をねぎらい、そして慈しむかのように、穏やかな眼差しで優しく見つめたのだった。

(完)